

広島女学院大学総合研究所年報

〔電子版〕

Vol. 17



広島女学院大学総合研究所

2013

目 次

I.	はじめに.....	所長 坂井堅太郎	(1)
II.	2012 年度公開セミナー報告.....	建築学科	(3)
III.	2012 年度広島女学院大学学術研究助成【研究概要報告】.....		
	〔個人研究〕		
	・ アンチモダンとしてのサド.....	宮本 陽子	(6)
	・ Bochner 可積分関数の多次元上の開領域での本質的有界変動の特徴 付けに関する研究.....	橋本 一夫	(8)
	・ 幼児期に行う「ヌード(裸体像)デッサン」が引き出す効果について..	三樹 正典	(9)
	・ 広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における計画・制作・受 容過程の比較研究.....	末永 航	(10)
	・ 建築家の思索にみる現象としての空間へのアプローチと生活世界の つきつめ方.....	小野 育雄	(11)
	・ 住宅維持管理情報を中心とした住環境づくりに関する研究.....	小林 文香	(12)
	・ ノハナショウブ地域個体群の遺伝子的関連性に関する分子遺伝学的 検証.....	田頭 紀和	(13)
	・ 高校教科「情報」と大学情報教育の連携の必要性についてー広島地 区における調査からー.....	中田 美喜子	(14)
	・ ロレンスの作品に見られるシャーロット・ブロンテ像.....	山内 理恵	(15)
	〔共同研究〕		
	・ 食事中の必須アミノ酸のバランスを軸とするアレルギー予防の新規 栄養管理の構築.....	妻木 陽子	(16)
	・ 大学組織運営における FD・SD の実践的課題に関する学際的研究..	松浦 正博	(17)
	・ 明治時代の日本について書いた在住西洋女性たち.....	Ronald D. Klein	(19)
	〔学術図書出版〕		
	・ 『芥川龍之介 異文化との遭遇』.....	足立 直子	(20)
IV.	2012 年度広島女学院大学学術研究特別助成報告.....		(21)
V.	2011 年度広島女学院大学学術研究助成【研究成果報告一覧】.....		(22)
VI.	客員研究員の活動報告.....	河村 暁	(26)
		田中 圭子	(31)
VII.	特別専任研究員の活動報告.....	山内 香澄	(33)
VIII.	2012 年度広島女学院大学学術研究助成【交付一覧】.....		(36)
IX.	2012 年度科学研究費補助金【交付一覧】.....		(37)
X.	関係規程.....		(38)

I. はじめに

所長 坂井堅太郎

本研究所は、広く人文・社会、自然の諸領域にわたる専門の学術理論および応用に関する総合的な研究を行い、学術・文化の創造と発展に貢献するとともに、地域社会に寄与することを目的としています。

2012年度の広島女学院大学学術研究助成の交付件数は、「個人研究」10件、「共同研究」3件、「学術図書出版」1件、「学会特別助成」2件、そして「学術研究特別助成」2件でした。

2012年度科学研究費補助金の採択は7件で、ほかに分担金の配分が1件ありました。また、厚生労働省の厚生労働科学研究費補助金の分担金の配分も2件ありました。

「広島女学院大学論集」第62号は12月に刊行され、5件が電子媒体として広島大学共同リポジトリ（HARP：Hiroshima Associated Repository Portal）を通じて公開されています。なお、2011年12月に刊行した「広島女学院大学論集」第61号に掲載された一編に不正行為があると認められ、3月29日に削除しました。

恒例の本学公開セミナーは、大学の学術研究成果の公開により、地域の皆様の知的好奇心におこたえし、地域社会に貢献することを目的に、毎年秋にシリーズとして行っています。なお、本セミナーは2012年度の開催により30周年を迎えました。また、2012年度より大学全体が改組され、学部や学科の構成が大きく変わりました。30回のセミナーでは、改組により新しくスタートした人間生活学部生活デザイン・建築学科が担当し、「すまい・建物の今とこれから」を総合テーマとして、多様な領域を担当する5名の教員を講師に迎えて、10月13日、20日、27日、11月10日の各土曜日に14時から16時まで、本学ソフィア2号館101,201教室で開催しました。本セミナーは、一般市民の方々と本学学生を対象とするもので、1回あたりの平均参加者数は74名で、延べ295名の方々が来場されました。いずれの回においても、担当教員が現在取り組む多様な領域における研究成果が、分かりやすく解説され、また、熱心な受講生との活発な質疑応答がかわされました。公開セミナーの成果は、広島女学院大学公開セミナー論集としてまとめられ、HARPを通じて発信されています。

学外との連携講座として、今年も牛田早稲田公民館と早稲田女性会との共催による「早稲田アカデミー」からの要請を受け、本学から講師を派遣しました。テーマはさまざまな分野にわたり、5月から11月にわたって計6回開催され、参加者総数は129名でした。「早稲田アカデミー」は、社会人向けの生涯学習講座として開設され、地元、牛田地区との連携が深まりつつあるなか、2013年度は10周年を迎えています。

財団法人「広島市ひと・まちネットワーク」によるシティカレッジでは、人間生活学部管理栄養学科の5名の教員が講師を担当し、「食と健康を考える」というテーマで、

6月7日、14日、21日、28日と7月5日の各木曜日に18時から19時30分まで、広島市まちづくり市民交流プラザで開催しました。参加者総数は延べ217名でした。

本研究所に所属する特別専任研究員1名は、自身の研究課題に取り組むほか、学習

支援の仕事を担当しました。客員研究員 3 名もまた、各人の研究課題の遂行と研究成果の社会への還元に努めました。研究員の活動の詳細については、本年報「研究員の活動報告」をご覧ください。

本研究所は、上記のように研究活動とともに地域との連携を進展させつつあります。総合研究所が担う、学術研究支援という役割が増し、また科学研究費の公的資金を取り扱う上での重要性が高まってきていることから、2011 年度から、専任職員が配属され、従来の嘱託職員 1 名に加えて、2 名の体制となっています。

総合研究所のあり方についての皆様のご意見やご提言をお寄せいただきますよう、お願いいたします。

Ⅱ. 2012 年度公開セミナー報告

人間生活学部生活デザイン・建築学科 建築士課程主任 本村佳久

2012年で30回目となりました広島女学院大学公開セミナーは、本学生活デザイン・建築学科の4名の教員と客員教授1名を講師として開催されました。「すまい・建物の今とこれから」という共通テーマのもと、各講師がそれぞれの建築専門分野の立場から講演しました。

第1回は細田教授の「もうひとつの木の家」と松井教授の「建築構造デザインの現在・未来」。細田教授は集成材等の新たな木造住宅・家具の工法・可能性について、松井教授は建築構造デザインの先端的な事例についてそれぞれの実作を紹介しました。第2回は真木准教授の「医療・福祉施設の建築設計」で、設計担当した医院・保育園の建築を中心として考察しました。第3回は谷尻客員教授の「日常からの建築」。日常的なものの見方を見直すことによる設計方法を実作の設計競技案・住宅設計等により説明しました。第4回は本村教授の「住居・建築デザインの方法・思想と未来」。現在の設計方法・思想を概観したうえで、設計競技案・住居・建築の実作を紹介しました。それぞれの講演で、現在の住居・建築設計の問題点・今後の展望について、ある程度のご理解をいただけたのではないかと思います。

公開セミナーには、参加者128名のうち毎回80名ほどの方々に来ていただきました。4回とも出席の方は33名でした。講演後は建築・福祉等の専門家や一般の方々から熱心なご質問を頂き、活発な質疑応答もできました。今回のセミナーが参加者の方々にとって、なんらかのお役に立てることができ、住居・建築に関する理解を深めていただくことができたとすれば主催者として大きな喜びです。講演後に各回とも多くの好意的感想を頂きまして感謝いたします。以下に、講演のテーマ・講義の概要について記します。

「テーマの概要」

今回の公開セミナーでは、学科改組で本年度から生まれ変わった「生活デザイン・建築学科」の新任教授・客員教授等により、「住居・建築の現在・未来」を探究します。社会的に活躍している建築家・建築構造家・研究者がそれぞれの多くの設計経験や視点からアプローチします。

講義内容は、現代における新しい木造住宅のあり方、建築構造デザインの現在と展望、これからの医療・福祉施設に関する建築設計の問題点や方法、種々のインテリア・住居・建築の新たな発想・考え方、美術館・複合建築等の建築設計の基礎となる思想・方法と今後の展望等についてです。住居・建築について、各々の講師が建築デザイン設計・構造設計した住居・建築作品等を題材としながら、多くの映像・設計図面等によりお話しします。

すまい・たてもの・まち・ひとのあり方をめぐるさまざまな現代的課題について、受講される皆様と共に考えることができればと思います。

「講義の概要」

第1回 10月13日（土）

「もうひとつの木の家」

生活デザイン・建築学科教授 細田みぎわ

無垢の木をふんだんに使用した豪華な木造の家—このような従来の価値観で、自分の住まいをとらえてよいのでしょうか。多様化した現代社会において、住み手の暮らし方にあった住居が「良い家」といえるでしょう。日本の自然環境に合うしくみを備えた木造の家を、さらに進化させた新しい木の家とはどういうものか、講師が設計したシンプルなデザインの「木の家」の事例、以前勤務していた安藤忠雄建築研究所でのエピソード等を交えて探っていきます。

「建築構造デザインの現在・未来」

生活デザイン・建築学科特任教授 松井英治

今日では、建物の設計は色々な分野の専門家によってなされており、その多くは設計デザイン・構造・設備の専門家によってなされており、そのひとつの分野の構造設計は、仕上げ材で表面を覆われることもあって、内容があまり理解されていません。本講義では、これまで講師が担当した構造設計を通じて、その主要な仕事である建築構造デザインについて説明を行い、建築構造について興味をもっていただき、建築について認識を深めていただくことをねらいとします。

第2回 10月20日（土）

「医療・福祉施設の建築設計」

生活デザイン・建築学科准教授 真木利江

社会の急速な高齢化を背景に、医療・福祉施設に関わる建築計画・設計も多様な課題に直面しています。本講義では2つの設計事例を中心に建築主の理念と設計者によるその具体化を紹介します。長く運営されてきた保育園に新たなデイサービスセンターの機能を加え複合的な地域の福祉拠点としたもの、そして自宅出産を出発点とする小さな産科診療所の設計です。事例を通して今後の医療・福祉に関わる場所づくりについて考えてゆくことにします。

第3回 10月27日（土）

「日常からの建築」

生活デザイン・建築学科客員教授 谷尻誠

建築は日々、人と隣り合わせです。

そのわりには、少し遠い存在でもあるように思います。

このセミナーでは日常にある、デザインのためのきっかけや考え方を建築を通して、お話できればと考えています。

第4回 11月10日（土）

「住居・建築デザインの方法・思想と未来」

生活デザイン・建築学科教授 本村佳久

いわゆる「近代建築」が20世紀初頭に欧米で確立されて以来、現在ではその「合理主義・機能主義」等も批判され、多様な建築デザインの方法・思想が世界で展開されています。本講義では、それらの多様な考え方・デザインを概観したうえで、講師が設計に携わってきた住宅・建築・都市計画また、師の白井晟一・磯崎新氏等の下で設計を担当した美術館・複合建築、原広司氏のもとでの世界集落調査なども例にとりながら、今後の建築のあるべき姿について考えます。

Ⅲ. 2012 年度広島女学院大学学術研究助成

【研究概要報告書】

〔個人研究〕

アンチモダンとしてのサド

文学部 日本語日本文学科 教授 宮本陽子

1. 研究目的と意義

アントワヌ・コンパニオンが『アンチモデルヌ』においてサドをアンチモダンの作家として位置づけてから久しいが、コンパニオンの判断がクロソフスキーの考察に基づいている点に問題がある。サドをアンチモダンとするのであれば、クロソフスキーに寄りかからず、アンチルソー、アンチフランス革命という視点から洗い直すべきである。正しい基準に基づいてサドのアンチモダン性を問い直すというのが本研究の目的である。

2. 研究方法

サドが作家として頂点を極めるのは 1795 年前後であるが、94 年 12 月に逮捕されるまで彼は革命政府下のピック地区で書記長、議長を勤めていた。この時期の著作を正しく読むためにはサドとジャコバンを考察しなければならない。特にロベスピエールとの関わりを探る必要があるが、さらにサドもロベスピエールも共に強く影響を受けたルソーの影響も考察する必要がある。本年度はサドが 1795 年に発表した『アリーヌとヴァルクール』、『閨房哲学』、および同年から準備し 1799 年（？）に発表する『ジュリエット物語』とルソーの『社会契約論』、ロベスピエールやサン＝ジュストの演説を比較をした。

3. 研究経過

2012 年度も京都大学での「1793 年の政治文書を読む」会に参加し、ロベスピエールやサン＝ジュストの文章を読むかたわら、『アリーヌとヴァルクール』、『閨房哲学』、『ジュリエット物語』と人権宣言の言葉を比較しながら、サドがアンチフランス革命と言われつつも、革命家たちと同じ言葉を使っていることを考察した。

サドと革命家たちの言葉に類似が見られるのは、いずれもルソーの影響下で考え、書いているからである。今年度はルソーの生誕 300 年にあたるためにシンポジウムが行われ、貴重な講演が数多く発表され、たくさんの示唆を受けることができた。

シンポジウムで初めて知ったラカナルの演説からルソーの受容の言葉からルソーの革命家への影響を考察する糸口となった。革命家たち、とりわけロベスピエールはルソーの言葉に従いつつも裏切りながら革命を遂行し、ルソーの抽象性を極端にまで具現化

しようとしたことで恐怖政治を出現させてしまった。サドはこの抽象性を何よりも憎み、小説のなかでアンチ・ルソーを実現しようとした。

4. 今年度の研究成果

発表：2012年10月21日日本フランス文学会秋季大会 「ワークショップ ルソーからの読解 ― 18世紀の語るもの」阿尾安泰司会、増田真、熊本哲也、と共に発表。
宮本陽子の発表は「ルソー・革命・サド」。概要は日本フランス語フランス文学会発行 『**chaier**』11号16-17頁に掲載

論文：宮本陽子「革命は文学を取り込むことができるか(1)」、『広島女学院大学大学院言語文化論叢』、第 16号 2013年3月、31 - 45頁

[個人研究]

Bochner 可積分関数の多次元上の開領域での本質的有界変動の特徴付けに関する研究

生活科学部 生活デザイン・情報学科 教授 橋本 一夫

1. 研究の目的

本研究は日本人研究者 岡崎悦明・本田あおい・佐藤坦氏の研究「An L_p -function determines ℓ_p 」(Proc. Japan Acad. Ser. A 84, 2008, pp.49–41) に触発された。彼らはこの論文で、ある数列空間の部分集合 $\Lambda_p(f)$ の線形性の特徴付けに興味を持ち、 f が L_p 関数のときの $\Lambda_p(f) = \ell_p$ となるための特徴付けを与えている。 $p > 1$ の場合には、完全な特徴付けが得られるが、 $p = 1$ の場合ではその限りではなかった。有界変動関数を導入することで、我々は 1 以上のすべての p に対してその特徴づけを与えることに成功した。これ等の結果については「On the linearity of some sets of sequences defined by L_p -functions and L_1 -functions determining ℓ_1 」として日本学士紀要 (Proc. Japan Acad., Vol.87, Ser.A, No.5(2011)) から出版された。本研究は領域並びに次元を一般化し、大きく分けて次の 3 つのケースへの応用を試みることである：

- (1) $p \geq 1$ に拡張.
- (2) 定義領域を全空間から一般の開領域 (開集合): $(\mathbb{R} \text{ 或いは } \mathbb{R}^N)$ から Ω .
- (3) 多次元領域に拡張: \mathbb{R} から \mathbb{R}^N .

2. 研究経過

今年度では、研究目的で述べた (1) の $p \geq 1$ への拡張が得られた。この結果については、現在論文として纏めて、発表予定である。また、今後は、(2), (3) についてもある程度の結果が得られたが、もう少し詰めが必要である。(1), (2), (3) から新たな拡張が起こった、それは、 L_p ノルムの一般化である、M. Riesz の意味での Φ 変動についても同様のアプローチが可能であることが分かり、次年度以降はこの問題へと研究をシフトする予定である。

3. 研究成果の公表

[論文]

1. On the Nonlinear Examples of Sequence Spaces Induced by L_p -function, Gen Nakamura and Kazuo Hashimoto, 『広島女学院大学生生活科学部紀要』第 19 号, 2012 年 3 月, pp. 73–84(査読無)

[口頭発表]

1. 「On the essential bounded Riesz Φ -variation」, 第 3 回「 L_p 関数の定める数列空間の線形性」に関するシンポジウム (九州工業大学 情報工学部), 2013 年 1 月, 橋本一夫・中村元.
2. 「Some examples of $\Lambda(f) = \ell_q$ for $1 \leq q < p < \infty$ and $f \in L_p(\mathbb{R})$ 」, 第 2 回「 L_p 関数の定める数列空間の線形性と位相」に関するシンポジウム, 2012 年 3 月, 橋本一夫・中村元.

〔個人研究〕

幼児期に行う「ヌード（裸体像）デッサン」が引き出す効果について

文学部 幼児教育心理学科 准教授 三桝正典

1. 研究目的

本研究は、幼児期の鑑賞題材を身の周りのものだけではなく、美術作品にも広げ、美術館という特別な空間において実物の「ヌード（裸体像）」作品を色々な視点から鑑賞し、デッサンを行うことを通し、そこから創り出される色々な発見や発想などを手がかりとして、幼児が本来もっている創造性や表現力などを引き出すことを目的とするものである。

2. 研究方法

2年次は、引き続きひろしま美術館での「ヌード（裸婦像）」をテーマに表現鑑賞実践を行い、収集資料や実践データの分析・まとめを行なった。

3. 研究過程

ひろしま美術館において、「裸体像」のデッサン教材として2年次はピカソの「女性の半身像（胸を出す女）」を用いて鑑賞～表現授業実践を行った。

2012年5月21日（月）11:00～11:30

聖モニカ幼稚園 年長園児 38名

ひろしま美術館に展示しているピカソ作「女性の半身像（胸を出す女）」を色々な視点から見て、「作品（裸体像）との対話」のテーマを加え、感じたことをパネルに描いていく活動を行った。1年次は、具象の立体作品であったが、今回は、抽象の平面作品を用いてデッサンを行った。ピカソという画家の名前を知っていた園児も多く驚いた。表現が抽象であるために、裸体像でも様々なイメージを展開させながら作品と関わっていた。表現に関しても、画用紙に模写させる前回の方法とは異なり、ピカソの描いた裸体像の一部から各自が続き絵を描いていく方法をとった。引き続きひろしま美術館での鑑賞活動の実践を継続し、美術館や幼稚園と連携を取りながら幼児期に行うデッサン（裸体像）が引き出す効果についてまとめていきたい。



作品との対話



園児のデッサン風景

〔個人研究〕

広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における計画・制作・受容過程の比較研究

国際教養学部国際教養学科 教授 末永航

1 研究の目的

われわれが「戦後」と呼ぶ 20 世紀後半以降は、世界的に見ても「美術」が美術館を出て公園や街路に展開し、「建築」がひとつの建物から都市に拡張され、公共空間が造形芸術の場として重要な役割を果たすことになった時期にあたる。

公共空間における造形活動（造園・建築・記念碑・彫刻など）は今日、住民の自己認識を表し、ときには観光の対象となるなど、日本の地域社会の中でもますますその重要性を増してきている。

ことに第二次大戦後の日本では、記憶の継承、中でも戦災のそれが最大の課題であり、その後に「アート」を利用した地域振興がはかられてきた。

この研究では、広島を中心とする公共空間の造形活動を対象とし、計画、実施、そして受容の過程を詳細に調査する。さらに、同様に大きな戦災を受けた長崎、沖縄の様態との比較を行うことによって、現代日本の公共空間美術の特徴的一面を明らかにすることを目的としている。

2 研究の概要

広島では被爆後比較的早期から総合的な都市計画が開始され、平和公園を中心とする祈念空間が、岸田日出刀に支持された若き丹下健三によってモダニズムの造形として実現し、世界に戦後日本の象徴として発信されたが、市民の意識とは微妙な齟齬がみられる部分も存在する。一方原爆ドームの保存は長い議論を必要としたが、後に世界遺産に登録されるなど文化資源として一定の成功をおさめた。

長崎ではカトリック教会が大きな役割を果たし、浦上天主堂の残骸はほとんど撤去されて新しい聖堂が建てられたが、被爆後につくられた空間は高い評価を得るには至っていない。しかし地元出身の北村西望による巨大な平和祈念像をはじめ、多くの「像」が設置された比較的無計画な祈念空間は、それなりに市民の思いを体現しているともいえる。

沖縄ではアメリカの支配がつづいたこともあり、組織的な記念空間の整備は遅れたが、「ひめゆりの塔」をはじめ自然発生的な祈念碑がつぎつぎと生まれ、山田眞山が執念をこめた像が完成したのは沖縄協会という複雑な歴史をもつ公的団体の力によるもので、すでに住民の気持ちからはかなり乖離したものだったようにみえる。

本研究では計画決定の過程、制作の状況、住民の評価などに関して詳細な資料を収集し、分析した。

3 研究の成果発表

まず近日中に、主として広島・長崎・沖縄の戦災記念について比較、概観した論考を発表し、その後順次各地についての個別研究をまとめる予定である。

〔個人研究〕

建築家の思索にみる現象としての空間へのアプローチと生活世界のつきつめ方

人間生活学部 生活デザイン・建築学科 教授 小野 育雄

1. 研究目的と意義

空間を建築課題の中心に初めて見据えた著作が 20 世紀前半にあらわれるが、それらは空間を客体的素材とする素朴な段階に留まっていたり、空間概念が学的検討を経ないままの粗雑なものであった。それらは建築という概念再検討にかかわるかたちで出てきた空間論であった。その後、空間概念を反省、制作しようとする者のなかに、一切の概念的加工以前の空間経験へ接近し、ラディカルに空間が問題にされるべき領野（フッサールらの示す〈生活世界〉）を視野に収めてのうえで無ければ思索＝制作は無い、という姿をもつ者たちがあらわれてくる。かれらに於いては、空間経験が主題化される一般的な事情を 20 世紀初頭以降の哲学・思想に視て、その哲学・思想を基盤とする建築空間論へと建築的思索を進めることが構想されることになるのである。建築家スティーヴン・ホールや増田友也等にはその流れを自らの内に受けとめている気配がある。本研究期間内に、ホールや増田等の建築家の思索のさらなる解明へ研究展開できればと考えている。本研究の展開の公開によって、現代行なわれようとしている建築することに於いて、個別の制作者ごとに、より善きインスピレーションを喚起できるであろうことが、意義である。同時に本研究の展開の公開を通して、制作品とともに生きる人びとに、かれらが 20 世紀初頭以降の哲学・思想の謂う〈生活世界〉をとくに開きやすく、感得しやすくすることが、意義である。

2. 研究方法

建築家ホール、増田等に於ける作品の出来ばえや水準を問題とはしない。かれらは自らの蘇生の道を手探りするように実作をくり返すが、その作品化という実践において実現をめざす方向性を本研究では問題としており、かれらの論理（ロゴス）にその方向性をみとめていく。ゆえに研究の重要な一素材はかれらの建築することに於ける言葉であり、それを 20 世紀初頭以降の哲学・思想についての理解と連動して構造解明するという方法をとる。

3. 研究経過

2 年度目にあたる今年度 2012 年度もひきつづき研究資料の収集・整理・分析をすすめた。また本助成研究期間内に出版予定していた本研究の展開の一断片を公開する書が無事初版発行された一桑子敏雄（東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授）他編著『感性のフィールド』東信堂。2012 年 9 月 5 日に出版された。その第 8 章 (pp. 137-153) 「建築家のサイト」が小野の執筆章である。以上が 2012 年度の研究概要報告となる。

〔個人研究〕

住宅維持管理情報を活用した住環境づくりに関する研究

人間生活学部 生活デザイン・建築学科 准教授 小林文香

1. 研究の目的と意義

近年、高度経済成長期に整備されたニュータウンや郊外戸建住宅団地において住民の急速な高齢化や人口減少が生じ、住宅・住宅地が適切に維持管理されず劣化・衰退していくことが問題とされ、対応策の検討や、問題解決の取り組みが行われている。しかし、今後は日本全体が本格的な人口減少社会を迎えるため、これらの問題は一部の計画された住宅地だけでなく、既存住宅地に共通する問題といえる。このような中で地域居住の持続を考えるのであれば、住宅・宅地を地域資源とみなし、地域主体による積極的なストックの活用や循環が求められる。以上をふまえ、本研究では住まいの維持管理に関する情報を地域居住の持続に活かすことを目的とし、住まい手の住宅維持管理状況の把握を行う。また、調査分析結果をもとに、住宅維持管理情報を活用した住環境づくりのあり方について検討を行う。本研究の成果は、地域居住持続を目的とした地域主体による住環境づくりのための基礎資料となると考える。

2. 研究方法

本研究では、地域の住宅維持管理情報を活用した住環境づくりのあり方について検討を行うために、以下の調査・分析を行う。

- 1) 地域における住宅維持管理に関する調査
- 2) 住宅維持管理に関する住情報の分析
- 3) 地域主体による住宅維持管理の先進事例調査

3. 研究経過

今年度は、広島市 A 地区の居住者 16 名（50 歳代～80 歳代）を対象に、住宅の維持管理状況、住み替え・住み継ぎの意向等に関するヒアリング調査を行った。これより、A 地区における住まいと居住者のライフステージの関係、地区内の住み替え動向、居住者の住み継ぎの意向に関する概要を把握することができた。また、地区における地域居住の選択肢について、いくつかの示唆を得ることができた。今後は、A 地区を対象にアンケート調査および地域活動団体へのヒアリング調査を行い、居住者の住生活の現状および住み替え・住み継ぎ意向を明らかにし、地域に必要な住情報について検討する。また、地域主体による住宅維持管理の先進事例調査を通し、活動体制および活動内容の現状把握を行い、地域居住の持続を実現するための住環境づくりのあり方について検討する。

〔個人研究〕

ノハナショウブ地域個体群の遺伝的関連性に関する分子遺伝学的検証

国際教養学部国際教養学科 准教授 田頭紀和

1. 研究の目的と意義

アヤメ属植物であるノハナショウブは、日本各地の湿地を中心とした環境に自生している。現在その自生地は人為的な自然環境の改変により減少し、特に西日本で個体群の減少が進んでいる。また、ノハナショウブは、古来より日本人に観賞用植物として用いられており、人為的な移入による地域個体群の遺伝的汚染や移入個体群の定着が起りやすい種でもある。こうしたノハナショウブにおいて遺伝子の多様性を考慮した保全を行うためには、遺伝的な多様性を把握し、地域の固有の個体群を選別する必要がある。本研究では、現在人間の開発のため減少傾向にある西日本のノハナショウブ個体群に焦点を当て、RAPD 法および ISSR 法による遺伝的多型分析、染色体分析を行うことにより、個体群間にある遺伝的関連性を明らかにするとともに、生物の分散と地域文化の交流を考えるための生物学的知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、ノハナショウブについて自生地調査・サンプル採集と、分子遺伝学的・細胞遺伝学的手法による遺伝的多型の解析を主として行う。自生地調査・サンプル採集は、鳥取県をのぞく中国地方 4 県と熊本県、宮城県で実施し、自生地では自生地の環境、個体群の規模、周辺環境の調査を行うとともに、葉と種子の採集を行う。また、分子遺伝学的手法としては、RAPD 法および ISSR 法を用い、各調査地の個体についての多型分析を行う。また、採集した種子は温室内で成長させた後、染色体分析に用いる。染色体分析としては、基本染色法による核型分析、FSIH 法によるゲノム構造特性の分析を行う。

3. 研究経過

2012 年度は、主として材料個体の獲得および DNA サンプルの抽出と、RAPD 法と ISSR 法の確立を目標に研究を行った。2012 年度のノハナショウブ個体の調査・採集は、広島県と岡山県、熊本県で行うことができ、それぞれの地域で自生個体から複数のサンプルを獲得することができた。こうした自生地調査で獲得した個体のうち 35 個体のサンプルから、各個体の DNA の抽出を行うことができた。

RAPD 法と ISSR 法の確立として、それぞれ 40 の RAPD プライマーと 80 の ISSR プライマーを用いた適正調査を行い、12 の RAPD プライマーにおいて、良好な結果が得られた。しかしながら、ISSR 法では、多くのプライマーで不明瞭な結果が現れたため、方法の再検討が必要となった。2013 年は、各個体 DNA において RAPD 法による解析を開始し、個体間の比較検討を行う予定である。また、ISSR 法についても再検討の後、個体分析を行う予定である。

〔個人研究〕

高校教科「情報」と大学情報教育の連携の必要性について一広島地区における調査から一

生活科学部 生活デザイン・情報学科 准教授 中田美喜子

1. 研究目的

初等教育における「アルゴリズム教育」の試みや中学校と高校の連携による「問題解決学習」など、新指導要領における学習内容の検討が行われている。教科「情報」について全国的な調査も必要であるが地域における現状把握と高大連携の可能性についての検討も同時に必要であると思われる。

本学における教育内容は、必修科目としてワープロ、表計算を利用したレポート作成（最終的には卒論の作成）。選択科目として、HTML などの文書表現をもちいて Web 作成および管理・運営、などからプログラミング言語や情報工学実習、ネットワーク概論と実習など、これらの科目を履修可能として開講している。

本研究では地方高校における新指導要領への対策と準備についての現状を調査し、大学における共通情報教育への連携を行うことを目的とする。

2. 研究経過

全国の高校の調査結果から（若林，2011），教科「情報」では「情報化社会を生きる力」「PC 活用の基本技能の習得」を目的としている教科という認識であった。大学における情報教育では「専門的な技術・知識の習得」と「情報モラル・マナー教育」「実務につながる実践的な内容」の順に学習内容を期待されていた。高校教員の方針や意識によって、学習している内容が大きく異なってくることが顕著になっている。そのため、能力別クラスにより、その差を意識しない環境で大学教育を実施する必要が認められる。さらに、内容として、「情報倫理の復習」と「専門的な技術・知識」を学習した科目の学生アンケートからは、「高校で学習したが再度詳しく学習できてよかった」という評価が多く、特に表計算やネットワークおよび 2 進数など「情報」のハードやソフトの詳しい内容については高校での学習が不十分であることが示唆された。

3. 今後の研究予定

2013 年度、新指導要領を 1 年生から実施していく年度となる。新指導要領の具体的な学習内容を調査することが可能である。実際に 2013 年からの指導要領で学習した生徒が大学へ入学してくる際に、大学の「情報教育」における内容および教授法の検討においては、大変参考になると思われる。2013 年度は経年の調査による変化部分を調査し分析を行う予定である。

〔個人研究〕

ロレンスの作品に見られるシャーロット・ブロンテ像

文学部 英米言語文化学科 准教授 山内理恵

1. 研究目的

本研究は、D.H.ロレンス(D.H. Lawrence)がエミリ・ブロンテ (Emily Brontë : 以下「エミリ」と表記)と『嵐が丘』(*Wuthering Heights*)について強い関心を持ち、そのことが彼の創作活動に影響を及ぼしたことを証明するために、申請者が平成16年から取り組み続けているものである。前回の申請(「D.H.ロレンスから見たブロンテ姉妹—エミリを中心に—」)では、エミリとロレンスとの関係性を2本の論文(「『嵐が丘』をロレンス風に読む」、「D.H.ロレンス研究: ジェシー・チェインバーズとブロンテ像」)で探る一方で、エミリと、エミリの姉であるシャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë : 以下「シャーロット」と表記)に対する彼の感情や捉え方の差異を把握するために、彼の書簡の中に見られるシャーロットと彼女の作品への言及を分析し、彼女への感情やイメージを読み解いた。今回の申請では、エッセイ集や小説などの出版物の中におけるロレンスの、シャーロットと彼女の作品への捉え方、そこに見られる感情などを読み解くことで、最終的にエミリとシャーロットに対して彼が抱く感情やイメージの相違について注目する。

2. 研究経過

2012年度は、ロレンスの作品中でのシャーロットへの言及を拾い上げる作業を行った。現時点では、のちに『チャタレイ卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*)に書き換えられる『ジョン・トマスとレディ・ジェイン』(*John Thomas and Lady Jane*)や、エッセイ『海とサルディニア』(*Sea and Sardinia*)などの作品中でシャーロットの名前や作品が言及されているのを見つけた。まだ調べ切れていない作品もあるため、今年度はそちらの作業を続けながら、データの分析を進めたい。また、ロレンスのブロンテ観と比較しながら、彼のジェイン・オースティン(Jane Austen)観についても調べ始めた。研究計画を立てた時はオースティン観については考えていなかったのだが、ロレンスのブロンテ姉妹に対する感情や態度の矛盾は、彼のオースティンに対する感情や態度の矛盾と通じているような印象を受けたため、並行してオースティン観についても調べてみることにした。

3. 今後の予定

6月に日本オースティン協会大会でロレンスのオースティン観についての発表をする。ロレンスの作品中でのシャーロットへの言及についても、秋頃からまとめ始める予定である。

〔共同研究〕

食事中の必須アミノ酸のバランスを軸とするアレルギー予防の新規栄養管理の構築

生活科学部 管理栄養学科 専任講師 妻木陽子

1. 研究目的および意義

本研究は、食物アレルギー患者の食生活の改善を図ることを目的とし、家庭内での食事管理の実態を把握するため、食物アレルギー患者の保護者を対象に、食物アレルギーに関する知識や、周囲の協力体制の必要性について検討した。また、食物アレルギーに対する新規の栄養管理法の基盤を構築するため、昨年度の研究では、食事たんぱく質中の必須アミノ酸であるヒスチジンに着目し、アレルギーの発症に及ぼす影響について検討した。その結果、ヒスチジンは、アレルギー関連遺伝子の発現に影響を与えることが確認されたため、本年度はヒスチジンおよびヒスチジンと β -アラニンのジペプチドである L-カルノシンが肥満細胞内のヒスタミン代謝や脱顆粒に及ぼす影響について検討した。本研究から得られた結果は、食物アレルギー患者の食生活および栄養管理法の構築に寄与するものであり、アレルギー学と臨床の分野において意味を持つものである。

2. 研究方法

- 1) 食物アレルギー患者の父親を対象に「父親の食物アレルギーについての知識」をアンケート表により調査した。また、母親を対象に「母親の父親に対する要望」を聞き取りにより調査し、家庭内での食事管理の実態を把握した。
- 2) 肥満細胞培養株 (RBL-2H3) にヒスチジンおよび L-カルノシンを終濃度が 0.5 mM、1 mM となるよう添加し、RT-PCR (reverse transcription-polymerase chain reaction) 法を用いてヒスチジン脱炭酸酵素 (histidine decarboxylase; HDC)、Th2 サイトカインである IL-4、IgE 受容体である Fc ϵ RI α の遺伝子発現を検討した。また、 β -ヘキソサミニダーゼアッセイでは、 β -ヘキソサミニダーゼ遊離率を、細胞内外の β -ヘキソサミニダーゼ遊離量から算出し、ヒスチジンおよび L-カルノシンの脱顆粒に及ぼす影響について検討した。

3. 研究経過

- 1) 「父親の食物アレルギーについての知識」の把握では、父親の食物アレルギーに対する知識として、アナフィラキシーへの理解や食品中のアレルゲンに関する認識が低いことが明らかとなった。また、加工食品や飲食店でのアレルギー表示に関する理解も十分ではなかった。一方、「母親の父親に対する要望」では、現状として父親が実践していることは母親の助けになっている上で、母親は父親に更なる育児協力を求めていることが分かった。
- 2) RT-PCR 法の結果より、L-カルノシンは HDC、IL-4、Fc ϵ RI α の mRNA 発現を抑制したことから、ヒスタミン合成に抑制的に働き、IgE 受容体を介した IgE 抗体の結合や、IgE 抗体へのクラススイッチを抑制させ、アレルギー反応を低下させることが示唆された。一方、 β -ヘキソサミニダーゼアッセイでは、ヒスチジン、L-カルノシンともに β -ヘキソサミニダーゼ遊離率を上昇することが確認された。特に、ジペプチドである L-カルノシンで脱顆粒が促進されたことから、食事から摂取されるアミノ酸により、アレルギー症状が惹起される可能性が示唆された。

〔共同研究〕

大学組織運営における FD・SD の実践的課題に関する学際的研究

人間生活学部 幼児教育心理学科 教授 松浦 正博
国際教養学部 国際教養学科 教授 石井 三恵
教授 木本 浩一
准教授 田頭 紀和

I. 研究目的

2008年4月よりわが国において、学士課程教育のFD活動が義務化された（「大学設置基準」）。大学院教育においてはその一年半前において、すでに義務化されていた（「大学院設置基準」）が。これらいずれの「設置基準」においても、共通するのはFD活動を“授業・研究指導の内容及び方法の改善”、“組織的な研修及び研究”としている点である。このようなFD活動の捉え方は、あまりに狭すぎるというのが多くの専門家の見解である。イギリスでは、SD、SDU（Staff Development in University）という言葉＝捉え方が一般的であると聞く時、その感は一層強い。

本研究・調査はFD活動のより広義の一般的理解を咀嚼しながら、本学のFD活動の対象、課題について考えるとともに、本学固有のFD活動の方向性について探り、提言を試みようとするものである。

FD活動は、本来「授業改善、授業スキルの向上」のみならず、広く「大学の組織的教育力の向上」と捉えられるが、そうであればこそ、本学においてもこの活動目的、あり方を真剣に考えなければならない時期にきていると考える。

II. 研究経過

本年度は、昨年度に引き続き上記研究テーマにそって

- (1) 高等教育に関する国レベルでの政策上の現状を把握する。
- (2) わが国の各大学におけるFD・SDの実践例を調査、分析すること。
- (3) 各大学でのFD・SDの試みを考察することにより、本学におけるFD・SDの方向についていくつかの点から提言を試みる。

その具体的活動として、本年は以下の研究会への出席、調査、文献収集を行った。

〔学会・研究会関係〕

1. 平成24年度SD推進ワークショップ（専任教職員むけ）私立大学の教職員職能開発～教育の質向上とFD・SDのみえる化～
 - ・出席者：田頭紀和 国際教養学部准教授
 - ・開催日時、場所：2012年6月23日（土）、東京
2. グローバル化時代に大学入学者選抜の未来を考える ―日本の21世紀ビジョンと高等教育マスタープラン―
 - （独立行政法人 大学入学試験選抜研究機構 主催）
 - ・出席者： 石井三恵 国際教養学部教授

- ・開催日時、場所：2012年10月18日（木）、東京
- 3. グローバル社会における大学教育の質保証
（大学教育学会、課題研究集会）
 - ・出席者：松浦正博 人間生活学部教授、木本浩一 国際教養学部教授
 - ・開催日時、場所：2012年11月23日（金）～24日（土）、
島根くにびきメッセ
- 4. 第18回FDフォーラム「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」
（大学コンソーシアム京都 主催）
 - ・出席者： 田頭紀和 国際教養学部准教授
 - ・開催日時、場所：2013年2月23日（土）～24日（日）、立命館大学
- 5. 九州工業大学教育フォーラム「大学教育改革のフロンティア」
（九州工業大学 主催）
 - ・出席者： 石井三恵 国際教養学部教授
 - ・開催日時、場所： 2013年1月23日（水）、東京

[他大学調査]

1. 「愛媛大学の学生支援活動のあり方について」の調査
 - ・調査者： 松浦正博 人間生活学部教授、木本浩一 国際教養学部教授
 - ・調査期間：2013年2月28日（木）～3月1日（金）

[文献収集]

以下の書を本研究のため購入した。

- * 山田礼子 『学びの質保証戦略』玉川大学出版、2012年

他40冊

Ⅲ.研究の成果の公表

これまでの2年間にわたる本研究成果を「報告書」として後日、公刊する予定である。

Western Women Write about Meiji Japan

文学部英米言語文化学科 教授 Ronald D. Klein

准教授 John Herbert

Purpose: This year's research project continued a study of Western women who came to Japan during the Meiji era. These women fall into 4 distinct categories—travelers, missionaries, sojourners and writers. Until now, however, there has never been a systematic collection of works written by these women and their roles to East-West understanding. Even more so, there has never been an attempt to combine them into a group to show how important their contributions were.

Research plan: Four research trips—one to America, one to England and two within Japan—continued the search for source materials on several of these women.

Results:

1) America The Museum of Mobile (Alabama) has the most extensive archives of writer Mary Fenollosa, wife of Professor Ernest Fenollosa. In her journals, she mentions many of the people she met and socialized with, including several missionaries like Mary Denton of Doshisha University and writer, Lafcadio Hearn. Harvard University's Rare Books Library contained a copy of *Iris*, a journal published by Yone Noguchi, containing original poems.

2) England Co-researcher John Herbert stopped by the Russell-Cotes Art Gallery and Museum in Bournemouth to view the collections of early travelers to Japan. At the British Library, Herbert found materials by and about Mrs. Mary Crawford Fraser, wife of the British ambassador to Japan, and Mrs. Anna d'Anathan, wife of the Belgian ambassador. Both women wrote numerous books about their time in Meiji Japan, both memoirs as well as novels.

3) Japan Many contemporary universities in Japan were founded by missionaries during the Meiji era, and Klein visited three of these universities. Kobe Jogakko is now Kobe Jogakuin University, founded in 1873 by missionaries of the American Board of Commissioners for Foreign Missions. Shokei Jogakkai in Sendai is now Shokei Gakuin University, founded by Baptist missionaries in 1892. Joshi Shogakko and Kyusei Gakko, founded by early Methodist missionaries in 1872 has now become Aoyama Gakuin University. All libraries offered archival materials about their missionary founders and subsequent teachers.

〔学術図書出版〕

足立直子著

『芥川龍之介 異文化との遭遇』

（双文社出版、2013 年 2 月発行）

本書は、2008 年 7 月に関西学院大学に提出した博士学位論文に、2 本の新たな論文を加え、全体を加筆修正した上で出版したものである。

具体的には、個々の作品分析を通して、芥川龍之介が〈前近代〉と〈近代〉の狭間に生き、また晩年は文化面や芸術面でのあらゆる新しい潮流が押し寄せてくる中、キリスト教という「大きな物語」を見据えつつ、最後まで芸術家として、異質なるものと誠実に向き合う中で諸作品を紡ぎ出したこと、更にはその結果、彼の文芸には異文化間の断絶を超克していく連帯の志向性が確認できることを指摘した。

本書の刊行は、研究上、教育上の両面において意義があると見通している。まず、研究上においては、芥川龍之介は現在、世界各国で研究が進んでおり、そこにおいて芥川文芸の現代性、国際性の内実を具体的に論証した本研究は、世界規模での芥川研究の発展を促進するものであると考える。次に、教育上においては、芥川は、高等学校の国語の全ての教科書に『羅生門』が掲載されているため、この作品でのイメージが固定化しつつあるが、多角的な視点を教育の場に取り込むことによって、読書への誘いは勿論のこと、国際社会を考える思考力を育てる点でも貢献が期待できる。

目 次

第一部 西洋との邂逅・故郷との訣別

- 第一章 『大川の水』論——創造者としての芸術的出発
- 第二章 『老年』論——人間的共感の視点において
- 第三章 『羅生門』論——老婆はなぜ「門の下をのぞきこんだ」のか
- 第四章 『芋粥』論——〈場〉と五位像との関係を中心にして

第二部 西洋受容の相対化・日本の近代の問題性

- 第一章 『開化の殺人』論——〈遺書〉の意味の二重性をめぐって
- 第二章 『開化の良人』論——追懷される三浦物語
- 第三章 『舞踏会』論——芥川の開化期認識を探って
- 第四章 『お富の貞操』論——芥川の貞操観とお富の〈確信〉

第三部 キリスト教との対峙

- 第一章 『南京の基督』論——宋金花の〈祈り〉における宗教性
- 第二章 『神神の微笑』論——キリスト教と日本の精神風土との対峙の内実
- 第三章 『河童』論——〈信〉と〈狂気〉を境として
- 第四章 『西方の人』『続西方の人』へ至る道——〈祈り〉の形象とその変容
- 第五章 『西方の人』『続西方の人』論——救いへの切望とクリスト像

IV. 2012 年度広島女学院大学学術研究特別助成報告

1. 篠原 収 国際教養学部 国際教養学科 教授
日本ビジネス実務学会第31回全国大会 2012年6月9日 - 10日

2. 末永 航 国際教養学部 国際教養学科 教授
カルチュラル・スタディーズ学会カルチュラル・タイフーン2012広島
2012年7月14日 - 15日

V. 2011 年度広島女学院大学大学学術研究助成

【研究成果報告】

〔個人研究〕

- ・山内 理恵 テーマ D.H. ロレンスから見たブロンテ姉妹 ―エミリを中心に―

成果 1) 学会誌等

山内 理恵 「D.H. ロレンス研究：ジェシー・チェインバーズとブロンテ像」 『広島女学院大学英語英米文学研究』 第19号 2011年3月 Pp. 39-78（査読付き） 広島女学院大学文学部英米言語文化学科

山内 理恵 「『嵐が丘』をロレンス風に読む」
『イギリス文学のランドマーク―大槻茂行教授喜寿記念論文集』 2011年11月 Pp. 91-98 大阪教育図書

山内 理恵 「D.H. ロレンスから見たシャーロット・ブロンテ（書簡編）」 『ことばが語るもの―文学と言語学の試み―』 2012年3月 Pp. 111-132 英宝社

2) 口頭発表

山内 理恵 「D.H. ロレンスから見たシャーロット・ブロンテ」 日本ブロンテ協会本部大会 2011年10月15日 熊本大学

- ・田中 沙織 テーマ 幼児と保護者における身体活動量の関連性
―幼児の身体活動向上のための支援へ向けて―

成果 1) 学会誌等

田中 沙織 「幼児とその保護者における身体活動の関連についての研究―降園後の身体活動を中心に―」 『広島女学院大学論集』 第60集 2010年12月 pp. 69-77 広島女学院大学

田中 沙織 「幼児とその保護者における身体活動の関連についての研究Ⅱ―幼稚園児と保育園児の比較から―」 『広島女学院大学論集』 第61集 2011年12月

2) 口頭発表

田中 沙織 「イギリスの身体活動ガイドラインにみる幼年期の身体活動に関する一考察—M-GTA を手法として—」
第 10 回日本発育発達学会 2012 年 3 月 17 日・18 日
於：名古屋学院大学

・篠原 収 テーマ 日系グローバル企業におけるダイバーシティ・マネジメント

成果 1) 学会誌等

篠原 収 「グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育」『広島女学院大学生生活科学部紀要』 第 20 号 2013 年 3 月 pp. 1 ～ 15

2) 口頭発表

篠原 収 「Current Conditions of Women's Employment and Labor」、「Transitions in Policies Geared to Women」
JICA アフリカ女性リーダー研修 ひろしま国際センター(東広島市) 2010 年 8 月 13 日

篠原 収 「Current Conditions of Women's Employment and Labor」、「Transitions in Policies Geared to Women」
JICA アフリカ女性リーダー研修 ひろしま国際センター(東広島市) 2011 年 8 月 12 日

篠原 収 「グローバル採用に関する一考察」 日本ビジネス実務学会中国・四国ブロック研究会(広島女学院大学)
2011 年 8 月 28 日

篠原 収 「日本女性雇用労働の現状と課題」 韓国・啓明大学校(招聘) 2012 年 3 月 20 日

・中田美喜子 テーマ 広島県備北地区における高大連携遠隔講義
—遠隔講義受講者の意識調査および生涯学習への応用について—

成果 1) 学会誌等

中田美喜子 「学生カルテを利用した個別指導の効果」, 『大学教育と情報』, 130 号, Vol19, No.1, pp5-7, 2010, 共著

中田美喜子「携帯電話の利用について ―日韓における比較から―」, 『広島女学院大学論集』, 第 60 集, 2010 年 12 月, 共著.

中田美喜子「コンピュータを利用したコミュニケーションと人間関係 ―女子大学生の意識調査から―」, 『広島女学院大学論集』, 第61集, 2011年12月, 共著.

2) 口頭発表

中田美喜子「科目連携型初年次教育の試み ―その 1―」, 大学教育学会, 2010年6月, 共同.

中田美喜子「質保証を補完するための支援システム 学生カルテを利用した個別指導の効果について」, 教育改革ICT戦略大会、2010年9月, 単

中田美喜子「中山間地域の高校を対象にした遠隔授業」, 第7回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム, 2010年9月, 単

中田美喜子「初年次教育における SNS を利用した教員支援」, 平成 22 年度情報教育研究集会, 2010 年 12 月, 単

中田美喜子「科目連携型初年次教育の試み―その2―」, 大学教育学会, 2011年6月, 共同.

中田美喜子「学生カルテシステムを利用した学習支援 - 教員評価と学生自己評価を用いて - 」, 教育システム情報学会中国大会, 2011 年 7 月, 単

中田美喜子「中山間地域の高校を対象にした遠隔授業」, 教育システム情報学会全国大会, 2011 年 8 月, 単

中田美喜子「ポートフォリオを用いた 3,4 年生ゼミ指導」, 教育改革 ICT 戦略大会、2011 年 9 月, 単

中田美喜子「VBA を利用したプログラミング基礎教育」, 2011 年度大学 ICT 推進協議会年次大会, 2011 年 12 月, 共同

- ・三桝 正典 テーマ 幼児期に行う「ヌード（裸体像）デッサン」が

引き出す効果について

成果 1) 学会誌等

三桝 正典 「幼児期に行う（裸体像）デッサン」が引き出す効果についてーレッジョ・エミリアアプローチのテーマを通してー
『広島女学院大学論集』第 61 集（電子版第 1 号）、2011 年 12 月

三桝 正典 「幼児期に行う（裸体像）デッサン」が引き出す効果について
『ひろしま美術館機関誌メープルニュース』第 74 集、2012 年 夏号 p. 5

2) 口頭発表

三桝 正典 2012 年度 広島県中学校教育研究会 2012 年 10 月 10 日 「総合的な学習の時間」シンポジウム、シンポジスト

[共同研究]

- ・R. クライン テーマ Western Women Write About Meiji Japan

成果 1) 学会誌等

Klein, Ronald. “Western Women Tourists Write About Meiji Japan, Part II” *HJU Graduate School Studies in Language and Literature* 15(2012):1-45.

Klein, Ronald. “Images of Meiji Japan on the Western Stage (Acts III & IV)” *HJU Studies in Language and Literature*

Klein, Ronald. “Western Women Write about Meiji Japan: An Annotated Bibliography” pending

VII. 客員研究員の活動報告

河村 暁

1. 研究概要

1) 研究の目的

近年、全般的な知的発達に遅れはないが読み書き計算などの学習や社会性などに困難のある発達障がい児者への支援について注目されている。発達障がい児者では、学習や社会性などの困難は年齢や環境によって変化したり、異なったあり方で顕在化することに留意する必要があるが、学齢期は学校生活における学習面や対人関係に困難を示し、大学など高等教育の期間ではそれに加えて単位を取得することや卒業論文執筆の遂行など、自分で計画し実行する必要のある課題に困難を示すことがある。発達障がい児者では、以前から実行機能やワーキングメモリに障がいのあることが指摘されている。実行機能とは、目的に関連する情報を処理し、関連しない情報による干渉を抑えながら適切な行動系列を計画し、目標達成の構えを維持する機能(Pennington and Ozonoff, 1996. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 37(1), 51-87)とされる。これらの機能についての理解を深めることで、幅広い年齢に渡る発達障がい児者の学習や計画・実行の困難の本質を明らかにし、効果的な支援につなげることができる。

本研究では、実行機能に関連するような困難を示す子どもと成人の、目標の記憶、計画・実行を促進するための支援方法を検討することを目的とする。

2) 研究の方法

以下の2側面について直接的支援と間接的支援の双方から検討を行う。

(1) 学生支援研究

第一に、直接的支援として、卒業論文の計画と実行に難しさのある学生を対象とした効果的な支援方法を検討する。第二に、間接的支援として、実行機能に困難のある学生の周囲にいる教員および学生を対象とした、実行機能の困難についての理解を促進する支援方法を検討する。第三に、記憶や計画と実行に困難のある学生の就労支援を想定して大学外の利用可能な施設の視察および連携を行い、支援方法の検討を行う。

(2) 地域支援研究

直接的支援として発達障がいのある児童への学習支援および、その保護者への面談・アドバイスをを行う。この支援は本学学生の実習と環境要因に関する検討とを兼ねており、「(1) 学生支援研究」を目的に含む。間接的支援として、公立小学校における参観と相談を行って支援方法を検討すること、講演会・研修会の講師を務めることにより、支援に関する理解の促進を図る。この支援は地域からの要望を受けて行うものであるが、発達障がいや、記憶や計画・実行に関する困難についての理解を促進する方法の検討を兼ねており、「(1) 学生支援研究」を目的に含む。

2. 研究成果一覧

2012年度の活動報告および研究成果を以下に述べる。

1) 学生支援研究

(1) 直接的支援

① 支援回数

卒業論文の執筆に困難があった学部学生 1 名に対して下表の通り個別面談による週 1 回 1 時間の卒業論文に関する支援を行った。

	前期	後期	合計
回数	6	28	34

② 支援方法

実践的な観点から効果のある支援方法は以下の通りである。

方法	内容	効果
作業時間実測	卒業論文に関わる特定の作業にかかる時間を実測し、そこから 1 週間、1 ヶ月に可能な作業量を予測するようにする。	ボトムアップ的に作業を進めれば良いわけではないことを理解でき、締切に合わせて作業量を調整する効果がある。
行程全体の視覚的把握	年間カレンダーによるスケジュールの視覚的な把握と、卒業論文の全体的なレイアウトを一目で捉えることができる用紙によって、作業の全体像を視覚的に把握する。	目標に合わせて作業を調整し、作業速度を高速化する効果がある。
作業に優先順位をつける	全体的に把握した内容の中で、「今、ここで」必要な内容をしぼりこみ、優先的な課題から取り組むようにする。	すべての作業を同時進行しようとせず、焦点をしぼるようになり、作業が効率的に進む効果がある。
不必要情報の抑制	優先順位の低い、今しなくてもよい課題に対しては、後で取り組むように符号をつける。	低い優先順位の課題に時間を費やすことが少なくなり、必要な作業が効率的に進む効果がある。
修正点指摘の構造化	論文に関して、指導者が目につく点を順に指摘するのではなく、指摘のしやすい形式の指摘(誤字、単語の間違い、条件、文体の一致)から始め、文法や内容について分けて、1 つ 1 つ指摘する。	指摘を学生自身が整理する必要がないので、指摘・指示が通りやすくなる効果がある。

方法	内容	効果
例示	抽象的に方法を指示するのではなく、実際にどのように取り組むのか例を示した上で、その例を見ながら学生が取り組んでいくようにする。	指示の取り間違いが減り、着実に執筆が進む効果がある。
ToDo・指示書の作成	口頭での指示ではなく、その週にすべき作業をToDoリスト、あるいは指示書として示し、後で読み返したり、チェックができるようにする。	同じことを複数回指示する必要が減り、学生自身の自律的な作業が増え、作業の進捗が促進される効果がある。

(2) 間接的支援

支援が必要な学生を間接的に支援するために、その周囲にいる学生や教員を対象として実施した。

①学習会Ⅰ

学生を対象とした、発達障がいや学習支援、実行機能、ワーキングメモリに関する学習会を下記の通り行った。1回の学習会は1～2時間であり、各回の参加者は3～20名であった。

	前期	後期	合計
回数	2	5	7

②学習会Ⅱ

教員(1名)を対象とした、発達障がいに関する学習会を下記の通り行った。1回の学習会は30分～1時間であった。

	前期	後期	合計
回数	0	2	2

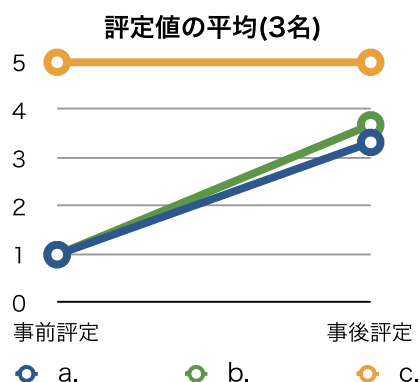
③参加実習による発達障がい児者に関する理解促進

後述するように週1回の頻度で発達障がい児への学習支援を行い、そこに実習として学部学生3名(2年生2名、4年生1名)が参加した。

参加学生は実習時に以下の項目について5件法で自己評価(事前評価)した。

- 発達障がいのある人や子どもとの接し方が分かる
- 発達障がいのある人や子どもへの支援の仕方が分かる
- 発達障がいのある人や子どもへの支援をしたい

5回の実習経験後、再度自己評価を行った(事後評価)結果、下図の通り、項目a、項目bについて評価値が向上した(項目cは事前評価から高い値であった)。参加学生は「発達障がいのある人と接することに抵抗がなくなった」と述べた。



④環境因子実地調査

もしも実行機能に困難のある学生が就職活動を行う場合、学生にとって、どのようなリソースがあるのか、どのような点が利用の妨げになるのかを実地で検討した。下表の通り広島地域若者サポートステーション(厚生労働省委託事業)、新卒応援ハローワーク(厚生労働省)の実地調査を行った。

	前期	後期	合計
回数	0	2	2

2) 地域支援研究

地域からの要望に基づき、発達障がいのある児童を対象とした学習支援や、小学校に対する支援を行った。

(1) 学習支援等

発達障がい児(4名)や保護者(4名)を対象として、下表の通り学習支援(おおむね週1回)や相談を行った。実行機能やワーキングメモリに焦点を当てた支援を行った。またこの支援の一部は、「1) 学生支援研究」における学部学生の実習機会とした。

	前期	後期	合計
回数	2	46	48

(2) 小学校支援

広島市内、広島市近郊の小学校(3校)において、下表の通り参観、支援を行った。実行機能やワーキングメモリに焦点を当てた支援を検討した。なおここで得られた知見の一部は、「1) 学生支援研究」における学習会の基礎的情報として活用される。

	前期	後期	合計
回数	0	12	12

(3) 研修会講師

広島県内の小中学校の教員を対象とした研修会において、実行機能やワーキングメモリに関連する支援の講演を行い、困難の所在の理解を促進するとともに、理解を促進する方法の検討を行った。

河村 暁「個別の学習支援の基本について」 第 66 回 LD を学ぶ教師の会学習会講演. 2012 年 8 月, ひろしま市民交流プラザ.

河村 暁「読み書きに困難のある児童の理解と支援について」 第 24 回広島県難聴・言語障がい教育研究大会(東広島地区大会)講演. 2012 年 12 月, 東広島市市民文化センター.

3) 研究成果の公表

研究成果の一部は以下の通り公表した。

河村 暁(2012) 学習の困難における実行機能. 日本特殊教育学会第 50 回大会学会企画シンポジウム 14「発達障がいのある子どもは、実行機能にいかなる困難を抱えているか」, 日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集, pp. 79-80.

河村 暁(2012) 読解の困難がある子どもへのワーキングメモリに配慮した読解学習支援. 日本教育心理学会第 54 回総会自主企画シンポジウム「教育心理学研究と実践に生かすワーキングメモリ理論」, 日本教育心理学会第 54 回総会論文集, pp. 910-911.

河村 暁(2012) 読解の困難を主訴とする児童における読解学習支援の効果. 日本ワーキングメモリ学会第 10 回大会抄録, p. 13.

(1) 活動概要

稿者は奈良時代以前に大陸から渡来した芳香剤の一種「薫物（たきもの）」の処方や調合法が記載された資料「薫物書（たきもののしょ）」を研究している。平成 24 年度は、日本の近世初期から中期における薫物文化の実相と変遷の解明を目的とした調査研究の一環として、当時の公武で規範とされた諸芸に関する豫楽院近衛家熙（1667-1736）の言説の聞き書きとされる山科道安（1677-1746）著『槐記（かいき）』諸本の調査検討を始めとする、以下の活動を実施した。

1. 「槐記研究会」の結成と開催

第 1 回 平成 24 年 9 月 18 日（火）14：00～17：30

於・広島女学院大学ソフィア 2 号館 301 教室

参加者（6 名）の自己紹介の後に、レジュメ作成用資料の提供と解説、会の方向性と次回の開催について相談。

第 2 回 平成 25 年 2 月 16 日（土）14：00～17：00

於・国文学研究資料館中村健太郎研究室

森田直美、中村健太郎（国文学研究資料館研究員）両氏による情報提供、田中による輪読資料の提供、田中と日高愛子氏（九州大学大学院生）によるミニ発表ならびに意見交換を行った後に、次回の開催について相談。

2. 近世初期以降の薫物文化に関する伝承を載録した資料の整理

東山御文庫、菊亭文庫（専修大学図書館、京都大学図書館）、陽明文庫ならびに鳩居堂熊谷家をはじめとする諸所に収蔵される薫物書のうち、江戸時代以降の類纂と伝わる伝書の積文を作成し、他書における同類文の探索や記述内容の解釈、薫物相伝に関与したとされる人物の特定作業を進めるほか、断片的に薫物の処方や調合法を載録する類書や文書の記述内容についても同様の作業を実施。

『槐記』原本とされる陽明文庫蔵写本（4 巻）は、山科道安自筆と見られる伝本であるが、明治某年に近衛家から某家に貸し出された際に火災に遭い、4 巻（正篇 3-5 巻と 6 巻の一部、続篇 3 巻）、しか残っていない。この残闕本を撮影したのが国文学研究資料館蔵マイクロ資料「癸中槐記」（請求記号 55-740-2）である。複写は陽明文庫での原本閲覧と許諾申請後にしか許されない。同資料館に所属する参加者が内容を確認したところ、現在までに刊行された活字諸本のうち、史料大観『槐記』の本文が残欠本のそれに最も近いことが分かっ

た。これにより、以後の開催時には史料大観の本文に依拠しながら読解を進め、主要と見られる諸本を参照しつつテキストと内容を検討してゆくこととした。

(2) 研究業績一覧

著 書

『薫集類抄の研究；附・薫物資料集成』 単著 三弥井書店 平成 24 年 12 月
独立行政法人日本学術振興会平成 24 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金（研究成果公開促進費））による刊行

講 演（市民向け公開講座）

1. 「現代に受け継がれる平家の香り～平忠盛が伝える薫物の秘伝～」 単独
市民カレッジ（広島市；WEST プラザ） 平成 24 年 4 月 7 日
2. 「『源氏物語』に学ぶ光源氏のリーダーシップ；第 1 回」 単独 ひろしまカレッジ連携講座（教育ネットワーク中国；広島女学院大学クックホール）
平成 24 年 7 月 2 日
3. 「『源氏物語』に学ぶ光源氏のリーダーシップ；第 2 回」 単独 ひろしまカレッジ連携講座（教育ネットワーク中国；広島女学院大学クックホール）
平成 24 年 7 月 9 日
4. 「ミニ講演；平家の香り体験（お香体験）」 単独 特別イベント；清盛の生きた「平安の世」体験（東京都；TAU） 平成 24 年 9 月 17 日
5. 「よみがえる平家の香りー平忠盛家の薫物と「香之書」についてー」 単独
博物館大学（広島県立歴史博物館） 平成 24 年 12 月 8 日

その他

線状香「平安香之書」（「女御黒方」「忠盛侍従」「頼盛荷葉」「白河法皇伝菊花」の四種一式、各十本）の監修 大河ドラマ「平清盛」広島県推進協議会企画事業 京都鳩居堂製造販売 平成 24 年 6 月 6 日発売

VIII. 特別専任研究員の活動報告

山内 香澄

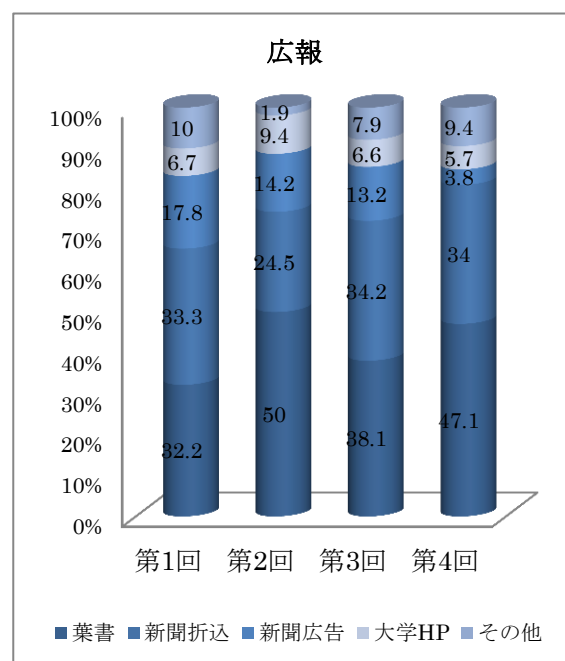
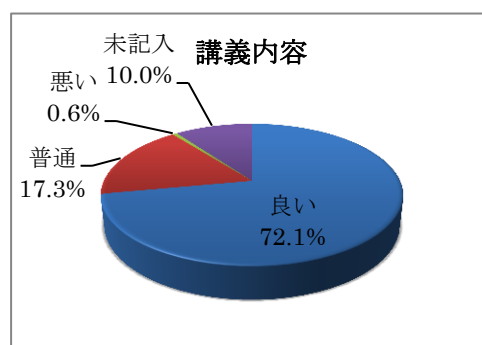
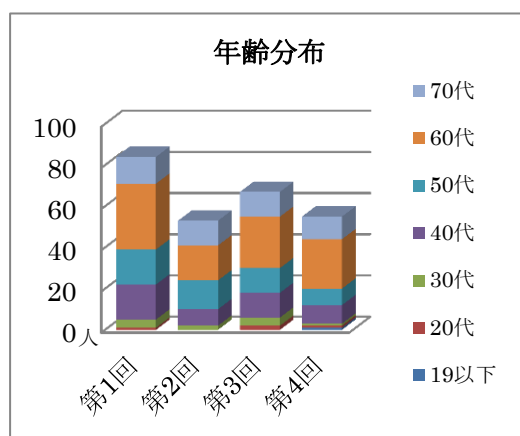
1. 広島女学院大学公開セミナーアンケート集計結果について

総合研究所では、毎年秋に一般市民を対象とした公開セミナーを主催し、今年で 30 回目を迎えた。2012 年度の公開セミナーは、「すまい・建物の今とこれから」をテーマとし、生活デザイン・建築学科が担当した。事前申し込み者数は、前年度よりやや少ない 169 名であったが、全 4 回出席し修了証書を授与された受講者は、前回より 3 名多かった。担当学科の専門とするテーマによって受講者数に偏りはあるもののここ数年の修了証書授与者は減少傾向にある。そこで、本報告では、受講者アンケートの結果を基に受講者の分析と自由記入欄に記入していただいた内容を「講義内容」、「その他」の二項目に分けて受講者の要望をまとめ、次年度以降の公開セミナーの一助になればと考えている。

【アンケート概要】

公開講座では、より良い公開セミナーを開催するために各回の受講者を対象としてアンケートを行っている。年齢や性別、職業、講義の内容に関する選択回答の他に会場に関する意見を書いていただくための自由記入欄を設けている。2012 年度のアンケート回収率は、84-93%である。

【選択回答】



【内容に関するもの】

- ・専門的なものよりも、分かり易い話
- ・細かい話しよりも、より基本的な話しをして欲しい
- ・問題点を提示する
- ・質疑等などでもいろいろなお話が聞けて楽しかった
- ・奇想天外な発想がすばらしい
- ・より具体的な内容
- ・興味を惹く内容
- ・事例を挙げる

【その他】

- ・パワーポイントが見やすい
- ・下向きだと話が聞きにくい
- ・声の大きさ
- ・あとから読み返すことが出来るような
内容に沿った資料を配布して欲しい
- ・レーザーポインターの使用は、好評
- ・時々ユーモアを交えると退屈しない

【まとめ】

本報告では、いかに受講者を増やすかという広報に対する視点ではなく、アンケートの概要にあるようにより良い公開セミナーを開催することに主眼を置いた。

受講者の大半は 60 代もしくは 70 代以上であり、わずかながら女性が多かった。受講のきっかけとしては、以前公開セミナーを受講された方を対象に送付したはがきによる方が最も多く、続いては新聞折り込みであった。このことから継続的に受講してくださる方が多いと推測される。

選択回答の講義の内容は、「良い」「普通」「悪い」の 3 択で回答していただいたが、全 4 回を通して平均 72% の受講者の方々から「良い」との好意的な意見をいただいた。これに対して、「悪い」との回答は、0.6% にとどまった。一方、自由記入欄の講義の内容に関する回答からは、より具体的なご意見をいただくことができた。受講者の方々には、表面的なものではなく、ある程度専門に踏み込んだ話をしてほしいや専門的な話を興味深かったとする一方で、理解できなかったという声も見られた。そのため、細かく難解な話はよりは専門領域の基本的な話を具体的かつ分かり易くすることを求められているようである。また、心地の良い話ばかりではなく問題点を提示したり、違う視点からの考察や新たな発想を提供したりするのも良いということがアンケート結果からわかった。

また、その他としては、聴衆の方を見て話をすることや声の大きさ、配布資料等、外的な要因も聴衆を惹きつけるのに効果があると思われた。例えば、パワーポイントの見やすさ(文字や写真:情報を詰め込みすぎず、すっきりとした感じに仕上げる)、声の大きさ(音響設備にも因るが)、配布資料が内容に沿っており、自宅でも読み返すことができるもの(再見の可能性があるので)が欲しいとの意見も見られた。加えて、質疑応答に応じ、聴衆が疑問に思った点+話題を提供するのも好評であった。

2. 2012 年度の研究概要ならびに研究成果一覧

【研究概要】

今年度は、博士論文で扱った作品の中でも、センセーション・ノヴェルとみなせるか最も議論の余地があるとされる Charles Dickens の *Great Expectations* について、そのジャンルの要素を再検討した。*Great Expectations* がセンセーション・ノヴェルに含まれるかどうかについての問題は、Dickens が偉大な作家であるということにもあるが、今回は純粋に要素との関連から検討することにした。まずどのような要素がセンセーション・ノヴェルに関連しているのかを調べるためにセンセーション・ノヴェルと呼ばれる小説群を再読した結果、登場人物の identity の曖昧性が共通して見受けられることが分かった。そこで、*Great Expectations* における登場人物の identity を取り上げ、作品の中で個々のキャラクターの identity がどのように変化するのかを考察することにした。

Great Expectations の主人公 Pip がジェントルマンとしての修養課程で感じる identity の戸惑い、他者によって作られた identity を持つ Estella、自分自身で殻の中に閉じこもり identity を失ってしまった Miss Havisham や Pip だという Orlick などの主要な登場人物たちを分析していくうちに彼らの真実の identity はどこにあるのかという問題にたどり着いた。そして、これらの問題は、ヴィクトリア朝の社会世相を映しているのではないかと思われた。この点だけから、*Great Expectations* をセンセーション・ノヴェルであると断定することは難しいが、その要素は十分持っているという結果が得られた。

研究成果の一部は、10 月に高知大学で開かれた日本英文学会中国・四国支部大会で発表した。そこで、Dickens の作品をセンセーション・ノヴェルに含めるかについて、先生方から様々なご意見を拝聴し、さらに研究の余地があると感じた。

【2012 年度の研究成果一覧】

○論文

「*Great Expectations* における identity の曖昧性」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第 16 号、2013 年 3 月発行。

○口頭発表(学会)

「*Great Expectations* における identity の喪失」、日本英文学会中国四国支部第 64 回大会(於:高知大学)、2012 年 10 月 27 日。

○その他

- ・「*The Woman in White* における恐怖」、『日本英文学会中国四国支部第 63 回大会 Proceedings』 2012 年 7 月発行。
- ・「*East Lynne* における女性と道徳」、『日本ヴィクトリア朝文化研究学会 ニュースレター』 2012 年 6 月発行。

Ⅸ. 2012 年度広島女学院大学学術研究助成 【交付一覧】

研究代表者 (所属学部)	研究種目	研究課題名または書目	交付年度(研究期間)	備考
宮本 陽子 (文学部)	個人研究	アンチモダンとしてのサド	2012(2011-2012)	継続
橋本 一夫 (生活科学部)	個人研究	Bochner可積分関数の多次元上の開領域での本質的有界変動の特徴付に関する研究	2012(2011-2012)	継続
三樹 正典 (文学部)	個人研究	幼児期に行う「ヌード(裸体像)デッサン」が引き出す効果について	2012(2011-2012)	継続
石井 三恵 (国際教養学部)	個人研究	教師のコミュニケーション能力開発	2012(2011-2012)	継続
末永 航 (国際教養学部)	個人研究	広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における計画・制作・受容過程の比較研究	2012(2011-2012)	継続
小野 育雄 (生活科学部)	個人研究	建築家の思考にみる現象としての空間へのアプローチと生活世界のつきつめ方	2012(2011-2012)	継続
小林 文香 (生活科学部)	個人研究	住宅維持管理情報を活用した住環境づくりに関する研究	2012(2012-2013)	新規
田頭 紀和 (国際教養学部)	個人研究	ノハナショウブ地域個体群の遺伝的関連性に関する分子遺伝学的検証	2012(2012-2013)	新規
中田 美喜子 (生活科学部)	個人研究	高校教科「情報」と大学情報教育の連携の必要性について―広島地区における調査から―	2012(2012-2013)	新規
山内 理恵 (文学部)	個人研究	ロレンスの作品に見られるシャーロット・ブロンテ像	2012(2012-2013)	新規
妻木 陽子 (生活科学部)	共同研究	食事中の必須アミノ酸のバランスを軸とするアレルギー予防の新規栄養管理の構築	2012(2011-2012)	継続
松浦 正博 (文学部)	共同研究	大学組織運営におけるFD・SDの実践的課題に関する学際的研究	2012(2011-2012)	継続
Ronald D. Klein (文学部)	共同研究	明治時代の日本について書いた在住西洋女性たち	2012	新規
足立 直子 (文学部)	学術図書出版	芥川龍之介 異文化との遭遇	2012	

X. 2012 年度科学研究費補助金

【交付一覧】

研究代表者 (所属学部)	研究種目	研究課題名または書目	交付年度(研究期間)		備考
			交付額 (直接経費)	交付額 (間接経費)	
木本 浩一 (生活科学部)	基盤研究(B) 海外	南アジアにける「地域」ガバナンスとしての共同森林経営に関する地理学的研究	平成24(平成22～24)		継続
			1,600,000円	480,000円	
山本 武史 (文学部)	基盤研究(C) 一般	頭子音・尾母音が音節量に与える効果について	平成24(平成22～24)		継続
			700,000円	210,000円	
山下 京子 (文学部)	〃	青年期女子の注意欠陥多動性障害(ADHD)への臨床心理学的アプローチ	平成24(平成22～26)		継続
			500,000円	150,000円	
大場 美和子 (文学部)	若手研究(B)	被爆者の英語による証言の理解と伝達の追跡調査—情報の解釈の変化の分析—	平成24(平成23～24)		継続
			1,000,000円	300,000円	
田中 沙織 (文学部)	〃	幼児の身体活動に関するカリキュラム作成への試み—保育現場の実践を意図して—	平成24(平成24～25)		新規
			2,000,000円	600,000円	
福田 道宏 (生活科学部)	〃	十八、十九世紀、宮廷御用絵師の通時的画壇史としての研究	平成24(平成24～26)		新規
			1,200,000円	360,000円	
田中 圭子 (文学部)	学術図書	薫集類抄の研究	平成24		
			1,700,000円		

※本紙上では研究代表者への交付について報告し、研究分担者として学内外から受けた配分額については記載しない。

X. 関係規程

広島女学院大学総合研究所規程 2031～2032

広島女学院大学公開講座運営規程 2033

広島女学院大学学術研究助成規程 2501～2505

広島女学院大学学術研究助成規程細則 2507

広島女学院大学学術研究特別助成規程細則 2509～2510

広島女学院大学「論集」執筆・編集規程 2521

広島女学院大学学会特別助成規程細則 2531

広島女学院大学特別専任研究員規程 2541

広島女学院大学における科学研究費補助金に関する規定 2551～2553

広島女学院大学受託研究規程 2561～2562

広島女学院大学総合研究所規程

1992.	10.	7	制 定
1993.	12.	17	改 正
1999.	1.	7	〃
1999.	3.	2	〃
2001.	5.	7	〃
2007.	4.	1	〃

(名 称)

第1条 広島女学院大学学則第49条に基づいて、本学に研究所を置き、広島女学院大学総合研究所（以下「研究所」という。）と称する。

(目 的)

第2条 研究所は、広く人文・社会・自然の諸領域にわたる専門の学術理論及び応用に関する総合的な研究を行い、学術・文化の創造と発展に貢献すると共に地域社会の進展に寄与することを目的とする。

(事 業)

第3条 研究所は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 理論的研究・実態調査研究及び実験研究
- (2) 調査・研究のために必要な資料の収集・整理
- (3) 研究発表及び研究報告書の編集・刊行
- (4) 研究会・講演会及び公開講座等の開催
- (5) 国内外の大学及び研究機関との交流
- (6) 調査・研究の受託
- (7) 広島女学院大学学術研究助成費の交付
- (8) その他研究所委員会で必要と認めた事業

(研究部門)

第4条 研究所は、研究活動の推進をはかるため、人文・社会・自然科学の諸部門を設ける。

(組 織)

第5条 研究所に所長、研究所員、研究員及び事務職員を置く。

2 研究所に専任研究員を置くことができる。

(所 長)

第6条 所長は学長に直属し、学長が学部教授会の議を経て専任教員の中から任命する。

2 所長は研究所の業務を統括し、研究所を代表する。

3 所長の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

(研究所員)

第7条 本学の専任教員は、すべて研究所員となる。

(研究員)

第8条 研究員は、専任研究員、兼任研究員、客員研究員とする。

2 専任研究員は、別に定める規程により研究所委員会の選考に基づき、大学評議会の議を経て、学長が任命する。

ただし、所長が必要と認めた場合、その推薦による特別専任研究員を置くことができる。特別専任研究員については別に定める。

3 専任研究員の身分は、前項ただし書きによるものをのぞき、教授、准教授、専任講師、助教とする。

4 兼任研究員は、各学部専任教員のうち、研究所委員会の推薦と所属長の承認を経て学長が委嘱する。

5 客員研究員は、研究所委員会の推薦に基づき、学長が委嘱する。

(事務職員)

第9条 事務職員は、第3条各号に関する事務を処理する。ただし、第7号の事務については別に定める規程、取扱内規によるものとする。

(研究所委員会)

第10条 研究所に研究所委員会を置く。

2 研究所委員会は、研究の計画、実施及び予算、決算、研究所の運営に関する重要事項について審議する。

3 研究所委員会は所長、専任研究員、各学部教授会から推薦された教員5名によって構成される。

4 研究所委員会は所長が招集し、その議長となる。

5 研究所委員会の委員の任期は、所長を除き1年とする。ただし、再任を妨げない。

附 則

1 本規程は2007年4月1日から施行する。

2 本規程の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

広島女学院大学公開講座運営規程

1972.	12.	4	制 定
1983.	9.	7	改 正
1989.	12.	20	〃
1992.	7.	31	〃
1999.	1.	7	〃
1999.	3.	2	〃
2000.	4.	1	〃

第1条 この講座は、市民の知的探求心にこたえるために広く大学の学術研究の成果を公開し、地域社会に奉仕することを目的とする。

第2条 この講座は、一般市民を対象に広く公開する。

第3条 この講座は、毎年秋の一定期間にシリーズとして適当な時間を開講する。

第4条 この講座は、総合研究所長及び各学科主任からなる公開講座運営委員会が企画立案にあたる。

第5条 この講座を受講しようとする者は、所定の申込書によって研究所事務課に申し込む。

第6条 委員会の事務は研究所事務課が担当する。

第7条 委員会は必要に応じてその他の教職員の出席を求めることができる。

第8条 本規程の改正は委員会の議を経て学部教授会がこれを行い、大学評議会に報告する。

附 則

本規程は2000年4月1日から施行する。

広島女学院大学学術研究助成規程

1994.	1.	31	制 定
1994.	11.	7	改 正
1995.	10.	2	〃
1997.	3.	11	〃
1999.	3.	2	〃
2000.	3.	7	〃
2001.	3.	27	〃
2002.	1.	8	〃
2002.	10.	8	〃
2004.	10.	5	〃
2007.	2.	6	〃
2008.	3.	4	〃
2008.	7.	1	〃
2010.	12.	7	〃

第1章 総 則

(制度の趣旨)

第1条 広島女学院大学における学術研究を奨励し、研究の促進に寄与するため「広島女学院大学学術研究助成」(以下「研究助成」という。)を設ける。研究助成の取扱については、本規程の定めるところによる。

(研究助成の種類)

第2条 研究助成には、(1) 個人研究 (2) 共同研究(3) 学術図書出版助成の3種目を置き、その他必要に応じて学術研究特別助成と学会特別助成を行い、特別助成については細則を別に定める。

(助成目的と助成対象)

第3条 各種目の助成目的と対象は以下のとおりとする。

- (1) 個人研究は、個人の研究の奨励を目的とし、教員が個人で進める研究計画を助成する。
- (2) 共同研究は、共同で行う研究の奨励を目的とし、教員が共同で進める研究計画を助成する。
- (3) 学術図書出版助成は、研究成果刊行の奨励を目的とし、個人又は学内者の共著の刊行を助成する。なお、本学専任教員の申請に限り、本学院(高等学校・中学校・幼稚園)専任教員との共著も含むものとする。

(助成額と助成期間)

第4条 各種目の1件ごとの助成額及び助成期間は以下のとおりとする。

- (1) 個人研究においては1年から2年で、単年度50万円以下。総額100万円以下。

- (2) 共同研究においては1年から2年で、単年度100万円以下。総額200万円以下。
- (3) 学術図書出版助成においては、助成年度の2月末日までに刊行するもので100万円以下。

第2章 申 請

(研究助成の申請)

第5条 各年度の研究助成の申請は、助成の前年度3月末日までとする。ただし、学術図書出版助成において助成年度に募集することがある。

第6条 研究助成の申請があった時は、第7条に定める申請資格及び第8条に定める申請要件を満たしている場合、これを受理する。

(申請資格)

第7条 各種目の申請資格は以下のとおりとする。

- (1) 個人研究は本学専任教員(外国人契約教員を含む)個人
- (2) 共同研究は本学専任教員(外国人契約教員を含む)のグループ
- (3) 学術図書出版助成は本学専任教員(外国人契約教員を含む)

2 研究代表者は、同一種目について複数の申請をすることはできないものとする。

3 継続研究の継続期間中、研究代表者は学術図書出版助成と特別助成以外の申請はできない。

(申請の要件)

第8条 学術図書出版助成については、助成年度の2月末日までに刊行を完了する見込みが確実でないものは申請できないものとする。

第3章 審 査 と 決 定

(審査委員会の設置)

第9条 各年度の研究助成の審査及び配分額を諮問するために総合研究所委員会のもとに審査委員会を置く。

(審査委員会の構成)

第10条 審査委員会は次の委員をもって構成する。

- (1) 総合研究所長
- (2) 各学科主任
- (3) その他審査委員会が委嘱する専門委員

2 審査委員会には委員長を置き、総合研究所長がこれにあたる。

(審査対象からの除外)

第11条 申請があったもののうち、研究代表者として他の公的助成金等の受給が確定したものについては、これを審査対象から除外する。

(適格要件及び審査基準)

第12条 審査委員会は、提出された申請書類に基づいて審査する。

2 審査は以下の適格要件について判断する。

(1) 申請に関する要件及び重複に関する事項

(2) 過年度における報告義務の履行状況

3 審査は以下の項目について行う。

(1) 研究目的、学問上の必要性の明確さ

(2) 研究計画の具体性及び申請経費との整合性

(3) 研究計画全般の総合的判断

(4) 近年の業績状況（萌芽研究を除く。）

(決 定)

第13条 基準に達したものが多数の場合は、審査委員会において、種目により前条3項目及び本学助成の受給状況などを総合的に判断して順位を決定する。

2 研究助成の各種目の採択件数及び採否は審査委員会の議を経て大学評議会で決定する。

(採択の通知)

第14条 研究助成の決定が行われた場合、速やかに採否を申請者に通知するものとする。

第4章 助 成 金 の 執 行

(研究計画の変更及び辞退)

第15条 研究助成の採択後に研究計画の変更が生じた場合、軽微な変更を除いて速やかに研究計画変更承認申請書を研究所に提出しなければならない。

2 採択後に本助成を辞退する場合は、速やかに届けるものとする。

(助成の停止)

第16条 研究計画に変更があるにもかかわらず、研究計画変更承認申請書の提出がなかった場合は、研究助成の執行を停止し、返還を求めることもある。

(研究費の執行)

第17条 研究助成の執行は研究計画に基づき、交付決定通知以降の支出とし、当該年度2月末までに完了しなければならない。個人研究、共同研究においては、併せて決算報告書を提出するものとする。ただし個人研究、共同研究における継続研究の場合は事前に許可を得て4月1日以降支出することができる。

2 2月末以降の執行は、これを認めないものとする。

(助成金の支出範囲)

第18条 各種目の支出範囲は別表のとおりとする。

第5章 受給者の義務

(研究計画に基づく執行)

第19条 受給者は、審査時に提出した研究計画に基づき、誠実に研究を遂行しなければならない。

(研究成果の発表・提出)

第20条 個人研究、共同研究については、各年度末までに所定の概要報告書を提出しなければならない。また、助成最終年度の次年度末までに、論集又は学術雑誌等に発表し、その研究成果を報告しなければならない。学術雑誌以外での成果の発表については別に定める。

2 学術図書出版については、助成年度内に刊行成果5冊を提出しなければならない。出版する図書のまえがき若しくはあとがきに「広島女学院大学学術研究助成制度」による出版物である旨を明記するものとする。

(業務違反)

第21条 本章に定める義務が遵守されなかった場合、助成を受けた者は当該年度を除き3年間、本学術研究助成に申請する資格を有しないものとする。

第6章 その他

(研究助成の事務)

第22条 本規程に定める研究助成の事務は、総合研究所事務課が担当する。

附 則

- 1 本規程は、2009年4月1日から施行する。
- 2 本規程の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。
- 3 本規程についての細則は別に定める。

付記(移行措置)

2009年4月1日施行の規程の改正に伴い、継続期間中の若手研究、萌芽研究、基盤研究においては、継続期間終了まで2008年3月4日改正の規程によるものとする。但し、第4章第18条については、改正後の規程を適用する。

附 則

- 1 本規程は、第7条第2項及び第11条を改正、第7条第4項を削除し、2011年3月1日から施行する。

別表 各種目の支出

種 目	支出範囲	支出できないもの
個人研究 共同研究	設備備品費（消耗図書を含む） 消耗品費（複写費を含む） 旅費*（グリーン料金を除く） 謝金 その他（通信費・印刷製本費 その他必要と認めるもの） 研究計画に必要な学会出席旅費・ 参加費	研究メンバーに対する謝金 その他研究に関連のない経費
学術図書出版 助 成	直接出版経費（組版代・製版代・ 印刷代・用紙代・製本代）	編集・校正・特製本等の諸費

*継続して 30 日程度の国外旅費の場合は、当該年度の休暇期間中に行うものとする。
ただし、短期間の場合はこの限りではない。

広島女学院大学学術研究助成規程細則

1995.	12.	11	制 定
1996.	12.	3	改 正
1999.	3.	2	〃
2002.	1.	8	〃
2008.	7.	1	〃

(申 請)

第1条 助成を受ける研究年度の前年度末までに、単価又はセット価格が5万円以上のものは見積書を、旅費については明細を提出する。

2 当初の申請に変更のない場合に限り、継続研究の継続申請は不要とする。

(審査と決定)

第2条 継続研究の助成額については、各年度毎に審査する。

(助成金の執行)

第3条 継続研究の予算の執行は年度毎とする。

2 図書館資料については、「広島女学院図書館資料管理規程」によるが、固定資産として計上する資料の基準は、5万円以上とする。

(受給者の義務)

第4条 成果の発表については、芸術系の研究の場合芸術活動の記録及び作品を成果とみなすことが出来る。

(軽微な変更の範囲)

第5条 研究方法の変更、分担者の変更、役割分担の変更、単価及びセット価格が5万円未満の使用内訳の変更は軽微な変更とし、研究代表者の判断に委ねる。単価及びセット価格が5万円以上の設備備品費(資産図書を含む)支出の場合は事前に許可を得て支出するものとする。

附 則

1 本細則の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

2 本細則は、2009年4月1日から施行する。

広島女学院大学学術研究特別助成規程細則

2001. 3. 27 制 定
2002. 1. 8 改 正
2002. 10. 8 "

(目 的)

第1条 本学における学術研究を奨励するために、顕著な成果をおさめた研究を対象とする。

(申 請)

第2条 学術研究特別助成の申請締切日は、次のとおりとする。第一次申請の締切は当該年度の6月15日まで、第二次申請の締切は当該年度の12月15日まで。
なお、申請の対象となる成果は申請締切日1年以内のものとする。

2 助成対象の成果が本学学術研究助成及び他機関助成を受けていないものであれば、重複申請をしてもよいものとする。

(助成額と助成期間)

第3条 当該年度の4月から申請日までの期間において1件10万円程度とする。

(申請資格)

第4条 学術研究特別助成の対象は本学専任教員で個人又はグループとし、当該年度の申請は2件を限度とする。

(審査委員会の設置)

第5条 学術研究特別助成の審査及び配分額を諮問するために総合研究所委員会のもとに審査委員会を置く。

(審査委員会の構成)

第6条 審査委員会は次の委員をもって構成する。

- (1) 総合研究所長
- (2) 各学科主任
- (3) その他審査委員会が委嘱する専門委員

2 審査委員会には委員長を置き、総合研究所長がこれにあたる。

(審査と決定)

第7条 学術研究特別助成については、提出された申請書類と学外の全国的学術雑誌等に発表された論文及び全国レベルの雑誌で高い評価を受けた論文をもとに審査する。また、全国的な規模での賞金が出ない受賞の場合は、申請書類を受賞報告書をもとに審査する。

2 学術研究特別助成の採否は審査委員会の議を経て大学評議会で決定する。

(採否の通知)

第8条 学術研究特別助成の決定が行われた場合、速やかに採否を申請者に通知するものとする。

(助成金の執行)

第9条 学術研究特別助成金の執行は、当該年度2月末日までに学術研究特別助成金として給与に含めて支払うものとする。

附 則

- 1 本細則は、2003年4月1日から施行する。
- 2 本細則の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

広島女学院大学「論集」執筆・編集規程

1975.	2.	施 行
1989.	12. 20	改 正
1992.	7. 31	〃
1993.	11. 17	〃
1997.	1. 7	〃
1998.	12. 16	〃
1999.	3. 2	〃
2005.	11. 9	〃
2007.	4. 1	〃
2011.	4. 12	〃

第1条 本論集には、専門学術に関する未刊行の論文を掲載する。

第2条 寄稿者は、本学の教授、准教授、専任講師、助教、助手とする。ただし、共同執筆者については、寄稿者が共同執筆者として推薦し、論集委員会が認めた者とする。

第3条 論集の編集及び発行の責任は、論集委員会がこれを負う。

第4条 論集の発行代表者は学長、編集代表者は総合研究所長とする。論集委員は総合研究所委員がその任にあたる。

第5条 論文の内容及び掲載の可否に関する判断は、寄稿者に委ね、論集委員会は原則として、これを行わない。ただし、編集の都合上、掲載時期、形式等について変更を求めることがある。

2 入稿後の大幅な変更及び取り下げについては、理由を明らかにして論集委員会に諮る。寄稿者に対して、当該年度を除き2年間の寄稿を停止するものとする。

第6条 論集の発行時期、論文の長さ及び体裁、論文の提出期限、校正等に関する編集方式については論集委員会に一任する。

第7条 委員会は必要に応じてその他の教職員の出席を求めることができる。

第8条 本論集に掲載された論文の著作権は著者に帰属するものとする。ただし、広島女学院大学は本誌に掲載された論文を電子化、または複製の形態などで公開する権利を有するものとする。

附 則

1 本規程の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

2 本規程は2007年4月1日から施行する。

附 則

1 本規程は第4条及び第5条を改正し2011年4月1日から施行する。

広島女学院大学学会特別助成規程細則

2001. 3. 27 制 定

2008. 7. 1 改 正

(目 的)

第1条 全国規模の学会で、本学院を会場として開催し、運営費の一部を助成することにより、本学の学術的広報活動に寄与できるものを対象とする。

(申 請)

第2条 学会特別助成の申請は助成の前年度3月末日までとする。

(助成額と助成期間)

第3条 当該年度開催される学会に対して1件20万円程度とする。

(申請資格)

第4条 学会特別助成は本学専任教員が申請するものとする。

(審査委員会の設置)

第5条 学会特別助成の審査及び配分額を諮問するために総合研究所委員会のもとに審査委員会を置く。

(審査委員会の構成)

第6条 審査委員会は次の委員をもって構成する。

- (1) 総合研究所長
- (2) 各学科主任
- (3) その他審査委員会が委嘱する専門委員

2 審査委員会には委員長を置き、総合研究所長がこれにあたる。

(審査と決定)

第7条 学会特別助成については、提出された申請書類に基づいて審査する。

(助成金の執行)

第8条 学会特別助成の執行は、当該年度2月末日までに完了しなければならない。

(受給者の義務)

第9条 助成年度末までに、学会終了報告書(会計報告を含む。)を提出しなければならない。

附 則

- 1 本細則は、2009年4月1日から施行する。
- 2 本細則の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

広島女学院大学特別専任研究員規程

2001. 6. 19 制 定

2004. 3. 2 改 正

(目 的)

第1条 本学大学院博士後期課程の修了者で、優秀な能力を持った人物の研究を継続・促進するため、総合研究所に特別専任研究員(以下「研究員」という。)を置く。

(資 格)

第2条 本学大学院博士後期課程の修了者で、引き続き研究活動を継続して行うことができ、研究科委員会より推薦された者とする。

(定 員)

第3条 原則として定員は1名とする。

(任 期)

第4条 研究員の任期は1期1年通算2年とする。ただし、総合研究所委員会が認めた場合はさらに1年に限り延長することができる。

(申 請)

第5条 研究員となる前年度の3月末までに研究計画書を指導教授のもとで作成し、総合研究所に提出する。

(審査と決定)

第6条 総合研究所委員会の審査を経て大学評議会で決定し、学長が任命する。給与については別に定める。

(研究活動)

第7条 研究員は指導教授のもとで研究活動を行う。ただし、研究活動が不可能になった場合は、その旨を速やかに総合研究所長に申し出なければならない。

(義 務)

第8条 研究員は研究の概要報告を、研究初年度末までに総合研究所に提出しなければならない。また、研究活動終了の年度末までに研究成果を学術雑誌等に発表し、総合研究所に報告しなければならない。

2 研究員は総合研究所長の命による義務を担うものとする。業務内容については別に定める。

3 本条に定める義務が遵守されなかった場合、研究員の資格を失うものとする。

附 則

1 本規程は、2004年4月1日から施行する。

2 本規程の改正は、総合研究所委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会及び研究科委員会に報告する。

広島女学院大学における科学研究費補助金に関する規程

2008.1.8 制 定

(目的)

第1条 この規程は、広島女学院大学（以下「本学」という。）における文部科学省（以下「文科省」という。）及び日本学術振興会が交付する科学研究費補助金（以下「科研費」という。）の運営・管理を事務組織規程第25条に基づき、総合研究所事務課（以下「総合研」という。）で行うこと及びその内容について定める。

(根拠)

第2条 科研費の運営・管理については、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（法律第179号）」「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（政令第255号）」「科学研究費補助金取扱規程（文部省告示第110号）」「独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究等）取扱要領（規程第17号）」「文科省研究者使用ルール（補助条件）」「学振研究者使用ルール（補助条件）」及び本学の諸規則等の他、別に定めのない限りこの規程による。

(責任体系)

第3条 科研費に関する運営・管理を適正に行うための責任体系を「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）（平成19年2月15日文部科学大臣決定）」に基づき、次のとおりとする。

- (1) 科研費について最終責任を負う最高管理責任者は、経理規程第1章第8条第4項に基づき理事長とする。
- (2) 科研費について、最高管理責任者を補佐し実質的な責任と権限を持つ統括管理責任者は、経理規程第1章第8条第2項に基づき学長とする。
- (3) 科研費について、実質的な責任者としての部局責任者は、事務組織規程第3章第10条第4項に基づき事務局長、および事務組織規程第3章第10条第10項に基づき総合研究所長とする。

(総合研で行う業務)

第4条 総合研は、科研費について次の業務を行う。

- (1) 科研費研究者名簿（以下「研究者名簿」という。）への登録等に関すること
- (2) 応募・交付申請に関すること
- (3) 交付される科研費（直接経費・間接経費・分担金）の受領、執行・管理に関する

こと

- (4) 科研費による出張に関すること
- (5) 実績報告に関すること
- (6) 研究成果報告等に関すること
- (7) 内部監査に関すること
- (8) 他の研究機関の科研費に関すること
- (9) 学内外からの問合せへの対応
- (10) その他、文科省及び日本学術振興会の定めること

(研究者名簿への登録等)

第5条 文科省の定める科研費への応募資格要件をすべて満たし、研究者名簿に登録することができる者は、次の各号の一に該当する場合とする。

- (1) 本学の専任教員(外国人契約教員を含む)
- (2) 特別専任研究員

2 研究者名簿への登録・記載事項の変更等は、名簿への登録等を希望する者が所定の期間内に総合研に申し出るものとする。

3 研究者名簿に登録した者が第1項に該当しなくなった場合は、文科省の定める転出・退職等の所定の手続きを行う。

(科研費による研究活動)

第6条 研究代表者は、科研費の交付申請を行う場合、不正行為等を行わない旨の誓約書(様式A-2-3)を提出しなければならない。

2 研究代表者及び研究分担者は、交付された科研費による研究活動について、文科省並びに日本学術振興会の補助条件及び本学の諸規則等を遵守しなければならない。

3 交付された科研費による研究代表者及び研究分担者等の研究活動は、本学の業務として行うものとする。

(科研費の執行・管理)

第7条 交付される科研費は、経理規程第2章第11条第2項に該当するものとする。

2 学長宛に送金された科研費は、研究代表者毎の預金口座に振り替えて管理する。なお、研究代表者毎の預金口座に振替えるまでの間に利息が生じる場合、及び、振替えた後に利息が生じる場合は、研究代表者に帰属し、その補助事業遂行の為に使用するものとする。

3 間接経費が交付された場合は、研究代表者毎の預金口座に振替えた後すみやかに所

定の方法により譲渡の手続きを行い、本学は譲渡を受け入れる。譲渡された間接経費は、本学関係部局と調整のうえ執行等を行う。当該研究代表者が他の研究機関に所属することとなる場合には、直接経費の残額の 30%に相当する額の間接経費を当該研究者に返還する。

- 4 科研費(直接経費・分担金)の執行の決裁者は、第3条第3号に基づき総合研究所長とする。
- 5 科研費(直接経費・分担金)により購入した設備、備品等については、研究代表者からの寄付を受け入れるとともに、当該研究者が他の研究機関に所属することとなる場合は、その求めに応じ当該研究者に返還する。
- 6 科研費(直接経費・分担金)の執行・管理の詳細については別に定める。ただし、他の研究機関に所属する研究分担者に分担金を配分した場合の分担金の執行・管理については、当該研究分担者が所属する研究機関の定め等に従う。

(内部監査)

第8条 文科省及び日本学術振興会の定める内部監査は、大学事務局が行う。

(他の研究機関の科研費)

第9条 他の研究機関の科研費について次の業務を行う。

- (1) 他の研究機関の研究分担者になる手続き
- (2) 他の研究機関の科研費による出張に関する手続き

(科研費に関する疑義)

第10条 部局責任者は、科研費の運営・管理等について疑義等が生じた場合、すみやかに統括管理責任者へ報告しその指示に従う。

附則

- 1 この規程の改廃は、大学評議会の議を経て学長がこれを行う。
- 2 本規程は、2008年4月1日から施行する。

広島女学院大学受託研究規程

2009. 10. 13 制定

(目的)

第1条 この規程は、広島女学院大学（以下「本学」という。）における受託研究の取扱いについて定め、適正な事務処理を図ることを目的とする。

(定義)

第2条 この規程において「受託研究」とは、本学の専任教員が民間企業、官公庁等外部機関（以下「委託者」という。）からの委託を受けて公務として行う研究で、これに要する経費を委託者が負担し、研究成果を委託者に報告するものをいう。

(受入基準)

第3条 受託研究の受入は、本学の教育研究上有意義であり、かつ、本来の教育研究に支障を生じるおそれがないと学長が認める場合に限り行うものとする。

(申込み)

第4条 本学に受託研究を委託しようとする者は、本学の専任教員と事前に協議の上、所定の受託研究申込書を、総合研究所を経て学長へ提出するものとする。

(受入の決定)

第5条 受託研究の申し込みがあった場合において、その内容が適切であると学長が認めたものについて、受け入れを決定するものとする。

2 前項において、申し込みの内容は、総合研究所委員会に設置される委員会（受託研究審査委員会）での審議と承認を経て学長の判断を仰ぐものとする。

(契約の締結)

第6条 受託研究の受け入れを決定したときは、ただちに学長と委託者との間に受託研究契約を締結しなければならない。

(研究費の負担)

第7条 委託者は、当該研究の遂行に必要な経費を負担するものとする。

2 委託者が負担する経費の内、30％に相当する額を、本学の雑収入として研究に必要な間接経費の一部に使用する。

3 前項にかかわらず、次に該当する場合の間接経費の取扱いは、受託研究契約の定めるところによる。

(1) 委託者が国の機関、独立行政法人、地方公共団体である場合

- (2) 当該研究に対する社会的要請が強く、本学の教育研究上極めて
有意義であるもの

(取得物品の帰属)

第8条 受託研究に要する経費により取得した設備備品の所有権は、原則
として本学に帰属し、委託者に返還しない。

- 2 物品の調達、人件費の支払、旅費等の計算は、受託研究契約に定めが
ある場合を除き本学の規程に準拠して行うものとする。

(所管部署)

第9条 受託研究の取扱いに関する所管部署は、総合研究所事務課とする。

附則

- 1 本規程は、2010年4月1日以降に締結される受託研究から適用する。
- 2 本規程の改正は、総合研究所委員会の議を経て大学評議会がこれを行
い、教授会に報告する。

編集委員

坂井堅太郎	総合研究所所長（代表）
木本 浩一	総合研究所委員
田頭 紀和	総合研究所委員
金田 仁秀	総合研究所委員
三木 幹子	総合研究所委員
石長孝二郎	総合研究所委員
三桝 正典	総合研究所委員

広島女学院大学総合研究所年報 Vol. 17

2013 年 7 月 31 日発行 ©

〔非 売 品〕

編集代表 坂井堅太郎

発行代表 長尾ひろみ

発 行 所 広島女学院大学総合研究所

〒732-0063 広島市東区牛田東四丁目 13-1

TEL (代)082-228-0386